学内広報

2021.4.22 no.1545

令和2年度卒業式より

藤井輝夫 第31代総長インタビュー
令和3年度役員等の紹介
令和2年度卒業式・学位記授与式
復興支援シンポジウム録

志ある卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO

藤井輝夫 第31代 総長、就任。

藤井輝夫（昭和39年4月5日生）
専門：応用マイクロ流体システム

昭和63年3月	本学工学部卒業
平成2年3月	本学工学系研究科修士課程修了
平成5年3月	本学工学系研究科博士課程修了（工学博士）
平成6年11月	本学生産技術研究所助教授
平成7年4月	理化学研究所基礎科学特別研究員
平成8年4月	理化学研究所生化学システム研究室研究員
平成11年4月	本学生産技術研究所助教授
平成19年2月	本学生産技術研究所教授
平成27年4月	本学生産技術研究所長（～平成30年3月）
平成30年4月	本学大学執行役・副学長
平成31年4月	本学理事・副学長

2021年4月1日、藤井輝夫先生が東京大学の第31代総長に就任しました。ご自身の思いを構成員に共有していただこうと、広報室長の横山広美先生が新総長との初対話に臨みました。今後6年間、先頭に立って東京大学を牽引していく藤井総長のメッセージと人となりをご確認ください。

新総長は「対話」を重視する

横山　4月1日付けの就任挨拶では「対話」を重視されていましたね。これにはどんな思いがこめられているのでしょうか。

藤井　社会的にも地球的にも様々な問題が山積するなか、コロナ禍の影響で、直接会って互いに話す機会が減ってしまいました。そのせいか、自分の思いが相手にきちんと伝わっていないと感じることが多々あります。思うに、このことがさらに多くの問題を生じさせているのではないでしょうか。この一年だけ見ても、紛争、差別、分断といった問題が増えているように感じます。様々な人々がもっと活発に対話を行い、共感を拡げていかないといけないのではないか。そうした思いを強く持っています。

私は五神真先生の下で社会連携と産学官協創を担当し、ある意味大学のフロントの部分、社会との境目となる現場をつぶさに見てきました。大学は自らの活動を学外にしっかり説明し、社会から理解とサポートを得る必要があります。活動をきちんと発信し、社会の皆さんと向かい合って話す対話の作業を続けないと、大学というものの存在自体が社会から認めてもらえないでしょう。大学は様々なよい活動を行っていますから、それを学外の方々にもしっかりとお伝えしながら共感を拡げていくことが大事だと思っています。

横山　同情ではない真の共感は、お互いの理解を深めます。また、対話のポイントは双方向性にあり、つまりこれまで伝える一方であった我々の側が社会の多様な意見を学び、大学が変わることにもつながります。たとえ意見の相違があっても、対話によって社会との信頼が醸成されることは、分断の時代にとても大事なことだと思い、総長が大事にされることを心強く思います。

藤井　ダイバーシティを重視するのは当然のことです。世界にはいろいろな人がいて、それぞれいろいろな背景をもって生活しています。大学が活動を行う際に、いろいろなバックグラウンドを持つ人が集まってディスカッションを行い、多様なアイデアを出し合うことが、活動の成果をより高いレベルへ引き上げるでしょう。大学にとってダイバーシティが重要な経営方針の一つとなるのは間違いありません。大学として最優先に考えなければいけないことだと思っています。

横山　新しい執行部については、どんなことを期待して任命されたのでしょうか。

またいつかいっしょに働きたいと思っていた先生を執行部の同志に

藤井　新執行部の皆さんのうち、総長補佐などの仕事を通じてともに汗を流してきた先生が数人います。何かの機会があればまたいっしょに仕事をしたいと思っていた皆さんです。今回、どなたに仲間になってもらうお願いをしようかと考えたときに顔と名前が浮かんできたのがこの方々でした。

私は2012年度に総長補佐を務めましたが、林香里先生と大久保達也先生はそのときの同期で、お二人とは様々な問題意識、課題意識をすでに深いところで共有できているように思います。国際とダイバーシティについてはこの数年間林先生が継続して担当してこられましたので、その部分をさらに進めていただきたいと思います。藤垣裕子先生は後期教養教育の改革を進めてきておられ、深い知見をお持ちです。文理を俯瞰する学問や教育の在り方の議論も深めたいと思っています。医学部と病院はもとより大学にとって大きな部分を占める重要な存在ですが、特にいまはコロナ禍の只中ですので、医療に精通する齊藤延人先生に執行部に入ってともに汗を流していただくことが重要だと思います。濱田純一総長の時代からずっと執行部の仕事をされてきた相原博昭先生、そして、この一年間ともに執行部で働いてきた大久保先生、石井菜穂子理事、里見朋香理事がいてくれることは、組織にとって、また私自身にとっても非常に重要です。結果的にバランスのよい布陣になったと自負しています。

横山　今回、学外からは岩村水樹理事がいらっしゃいました。東大とグーグルのパートナーシップがきっかけでしょうか。

藤井　直接的なきっかけというわけではないのですが、何度かイベントなどでお目にかかっていました。岩村理事はマーケティングのプロであり、女性の働き方改革についても推進してこられた方です。人事全般、大きな組織におけるチームの作り方や業務の進め方についても様々な知見をお持ちですから、その辺りを東大に導入していただけたらよいな、と以前から思っていました。また、これまでで言えば広報に当たりますが、大学の対外的なコミュニケーション機能の強化についてもご担当いただく予定です。

横山　女性が過半数ということが注目されましたが、ここにはこだわりましたか？

藤井　そういうわけではなく、ともに仕事をしたいと思った皆さんにお願いしたら結果としてこういう布陣になったということです。インパクトを狙ってこうしたというわけではありません。

4つの transformation への思いがこめられた WG 名

横山　3.2科所長会議資料の「藤井プラン」検討WG体制図を拝見しましたが、テーマの切り分け方とその略称が斬新だなという印象を受けました。研究、教育、協創、DX（デジタルトランスフォーメーション）、GX（グリーン～）、CX（コーポレート～）、Diversity & Global、MX（マネジメント～）という8つのWGが設定されていますが、これについて紹介していただけますか。

藤井　研究、教育はもちろん大学の本分たるものであり、協創は学外とともにやっていくということです。これらは大学の活動として当然考えるべきことということでWGを置きました。DXやGXは、教育・研究・協創のすべてに関係するものとして想定しています。Diversity & Globalは全体に共通する前提のようなもの。CXは、大学と社会とのコミュニケーションのあり方、大学自体のオペレーションや働き方改革などを含むテーマです。ここは岩村理事、広報戦略本部の武田洋幸執行役・副学長、職員人事担当の里見理事に進めてもらうことにしました。すなわち、教育・研究・協創はこれまでどおりの大学のアクティビティで、DX・GX・CXはそれらと直交するものというイメージ。もともとはマトリックス図のなかで、教育・研究・協創に横串を通すようなものとして捉えて描いていました。Diversity & Globalはもっとベーシックな価値観を支え、MXは大学を財務の面で支えるという重要な経営マネジメントと捉えています。マネジメントの改革は、これまで五神先生が大学を真の経営体にするとおっしゃってやってきました。私はそれをさらに一歩進めます。

横山　マトリックス的に考えるというのは藤井先生ならではという感じがいたします。

藤井　最初は図にいろいろ描き込んでいたんですが、途中で3次元になってしまい、あきらめました。様々な要素が直交する形で絵を描ければ多くの人にわかりやすく示せるかも、と思ったんですけどね。

横山　ネーミングも先進的ですよね。音声SNSの「クラブハウス」もさっそくお使いになっていると伺いました。新しいものをどんどん取り入れる新総長の誕生に期待がふくらみます。さて、昨年10月の記者会見では大学を「世界の誰もが来たくなるような学問の場」にしたいと述べられました。私たち構成員はどのようなイメージを持てばよいでしょうか。

藤井　もちろん「大学」ですから基本的には学問の場です。「誰もが」では学生、留学生、研究者、そして職員も想定しています。ここで働くとおもしろいことができそうだと思える場、誰もがここに来て働きたいと思える場にするにはどうしたらよいかという発想で捉えてほしいと思います。

横山　たとえば専門性の高い職員にどう活躍いただくかということも含まれるでしょうか。

藤井　はい。これまで理事・副学長として担当してきた社会連携本部では、ファンドレイザーという専門家がいましたが、広報でも国際でもやはり専門性の高い人は必要でしょう。専門性を取り入れることは進めたいですね。一方で、働く場所として考えたときに、新卒の学生は大学で働きたいと思ってくれるのか。実は、こんなに多種多様な活動をしている組織体というのは、大学以外だとそうはないと思うんです。学務に関する仕事ができるのは当然ですが、イベントの企画や実施もできるし、広報の仕事もできるし、病院に関わることもできるし、いまなら資金運用のような金融に関わる仕事だってできるわけです。働く場所としても魅力的な側面は数多いはずで、そこはもっと伝えたほうがよいかなと思っています。

産学官協創を教育にも活かす

横山　10月の会見で語った「学びと社会を結び直す」は印象的な言葉でした。これについても補足いただけますか。

藤井　いまの時代というのは、大学で学ぶ学生たちが働き始めたときに何が飛び出してくるかわからない、どんな課題に取り組むかも予想できない部分があります。でもそこでなんとかやっていかないといけない。学んだことを実際に現場で生きた知識として使うことが重要です。大学で学ぶだけでなく、海外や地域の自治体、学外の学術機関などに飛び出していって、学んだことを使う機会を増やし

たいと思って言いました。

東大は産学官協創で様々な企業と連携活動を展開しています。インターンシップというといまは就職活動と直結していますが、就職と関係なく、学んだことを現場で活かす機会をつくってもらおうと思ってインターンシップをやってきました。そんな機会を増やしていきたいんです。産学官協創の活動を、学生の学びの場を拡大することにも活用したいと思っています。

横山　学内で学び、実践の場にそれをあてはめるときにまた学ぶわけですね。

藤井　そうです。実践の場で足りないことに気づいて、また大学に戻ってきて次の学びのモチベーションにつなげる。それが「結び直す」ということだと思います。

デジタル化でコミュニティを拡大

横山　10月の会見ではオペレーションのデジタル化にも触れておられましたね。

藤井　事務手続きのデジタル化はもう待ったなしの状況です。特にコロナ禍の状況ではなるべく紙を使わずに物事が進められなければならず、そのためには既存の様々なシステムを上手につないで使えるようにしないといけません。そうして事務作業の負担を軽減し、そこに使っていた時間を次の工夫にあてるようにしたいと思います。

もうひとつはキャンパス自体のサービスのデジタル化です。たとえば障碍（がい）がある人にとって、どのルートを選べばキャンパス内を移動しやすいのかを調べるだけでも簡単ではないでしょう。デジタル化によりそうしたことにもっと配慮できればと思います。部屋を使うときの手続きとか、授業履修の管理なども、学生が手元で手軽にできるようにしたいですね。実はそのためのアプリについては、一昨年から議論を始めています。学生時代にこのアプリを活用し、それを卒業後も使えれば、大学と卒業生はつながり続けることができるでしょう。卒業生とのつながりは東大にとって非常に重要。大学というコミュニティを拡大するツールとしてのデジタル化にも注目しています。

横山　デジタルツールは、ある種の対話的要素があるといいますか、用意するだけでなく使う側の意識も巻き込まないと長く使われないようですが、それができたら楽しみですね。藤井先生は、構成員全員にビジョンを理解してもらいたいともおっしゃっていました。デジタル化についても、たとえば情報システム系の人だけではなく皆でやるんだということでしょうか。

藤井　そのとおりです。東大を誰もが来たくなるような場、誰もがいきいき活動できる場にしていくんだ、という気運、カルチャーのようなものを全構成員で共有できるようにしたいですね。

（取材日＝2021年3月26日）

※藤井総長は４月５日に新型コロナウイルス感染が判明し、療養していましたが、４月16日に無事公務に復帰しました（本取材の関係者に感染はありませんでした）。

一問一答で見る藤井新総長

1 専門の「応用マイクロ流体システム」とは?

◉デバイスの技術です。普通、デバイスというと電子的なものを思い浮かべるでしょうが、そうではなく液体を用いるデバイスの技術です。マイクロサイズの流路構造のなかに分子とか細胞などを入れて使います。身近なところでいえば、PCR検査とか、細胞を培養して薬を開発するのに応用できる技術です。

2 最も影響を受けた先生は?

◉浦環先生（本学名誉教授）ですね。

3 教養学部時代の授業で印象的だったのは?

◉浦先生の全学ゼミで、アメリカ海洋大気庁（NOAA）のぶ厚いダイビングマニュアルを六本木の生研に行って読むという不思議な授業があって、これが一番印象に残っています。

4 教養学部時代の第二外国語は何を選択した?

◉フランス語。理由は忘れました。

5 工学部に進んだ理由は?

◉もともと海の中を調べる技術がやりたかったんです。海洋学ではなく、海の中で使う機器を作るほう。それをできる大学というと実はそれほど数はなく、必然的に東大工学部に行こうと思いました。

6 海の中で使う機器に着目したきっかけは?

◉子どもの頃にアポロの月着陸をテレビで見てすごいと思ったんですが、月のことがいろいろわかるのがすごいというよりは、人の技術で月に行けるようにしたのがすごいと思ったんです。宇宙に行くのはすでにやられていたので、ならば自分は深い海のほうだな、と。マリアナ海溝の最深部まで行った人は月に行った人より少なく、当時はまだ二人しか行ってなかったんです。それで海の中のほうをやりたいなと思いました。

7 研究者になったのはなぜ?

◉「これは自分の仕事です」と20代で言いたい気持ちがありました。いまなら起業を考えていたかも。当時はバブルの頃で、銀行とか証券とかに進む仲間もいましたが、大企業に入ると若手は大事業のほんの一部分しか担当できない、というイメージを自分は持っていたんです。研究者だったら論文を書いて「これは私の仕事です」と言えます。「これは藤井輝夫の仕事です」と言いたくて研究者になった面が大きいです。

8 モットーは何ですか?

◉自分が楽しいこと、興味を持つことには手を抜かず、努力を惜しまない。大学経営の仕事もそうやってきたら総長になっていたという感じです。

9 理化学研究所時代には何をやりましたか?

◉当時のボスから新しいことを始めるよう助言されてマイクロ流体デバイスの研究を始めたのが理研でした。そこで初めてバイオの実験のやり方などを教えてもらって新鮮でしたね。

10 新しいことを始めるのが好き?

◉はい。新しいことを始めたときのわからない感が好きなんです。未知の分野に入ると、それまで自分がやってきた分野の見方や視点をもっている人がそこにはいません。だからこそ自分がそこに新しい視点をもちこめるわけです。これはダイバーシティの価値や楽しさにも通じますね。

11 CNRS※国際連携研究センターではどんな仕事を?

◉ラボ全体のディレクターを2007年から7年間務めました。フランスから20人ほど研究者が来ていろいろなラボに入って活動するのを統括する役割です。MEMS※系のラボにバイオや化学の研究者を呼んで、ナノテクで分子を扱うとかバイオ応用のマイクロデバイスをやるというような分野融合を手がけました。

12 生誕の地、チューリッヒの思い出は?

◉生まれただけなので思い出はないんですが、在外研究でスイスに行った際、まだ存命だった母と生家を探しに行ったら40年前と同じ家があった、という思い出はあります。

13 麻布高校時代の部活は?

◉水泳部。得意なのは平泳ぎでした。

14 バンド活動ではどんな曲を?

◉フュージョンやAOR※のバンドのギターとしてThe 24 street bandのコピーなどを主にやっていました。

15 東大生の頃は何をしていた?

◉海洋研究会というダイビングサークルにいました。西表島や小笠原の父島で長期合宿するサークルでした。なかなか行けないような場所でダイビングをするのが楽しかったです。

16 好きなお酒は?

◉シャンパンですね。

17 愛車は?

◉ブルーのアウディ。最近は運転しないようにしていますが。

18 好物は?

◉甘いもの。チョコとか。

19 愛用のブランドは?

◉洋服だと、Paul Smithですね。

※フランス国立科学研究センター　※Micro Electro Mechanical Systems　※Adult Oriented Rock

令和3年度役員等の紹介

総長

(任期)令和3年4月1日～令和9年3月31日

藤井 輝夫

理事・副学長

相原 博昭
(担当)経営企画、財務、社会連携・産学官協創
未来社会協創推進本部、目標・計画、財務改革、東大基金、WPI、国際高等研究所、IPC、イノベーションコリドー

大久保 達也
(担当)総務、教育、施設、情報
危機管理、会議、教育運営委員会、PEAK、施設長期戦略、技術組織整備、コロナ対応、センシングフィールド

齊藤 延人
(担当)研究、懲戒、病院
研究力推進、教員人事、大学院教育改革、病院経営改革、人事制度改革(研究支援)、環境安全衛生、図書館、総合研究博物館

藤垣 裕子
(担当)学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理
学生委員会、学生懲戒、奨学厚生、学生就職、学生スポーツ調整、評価、教員情報、科学研究行動規範

林 香里
(担当)国際、ダイバーシティ
グローバルキャンパス、GLP、ハラスメント防止、バリアフリー、相談支援

理事

里見 朋香
(担当)事務組織、法務、人事労務、コンプライアンス
組織能力向上推進、人事制度改革(事務)、情報公開、業務改革、情報セキュリティ

石井 菜穂子
(担当)経営改革特命
SDGs、グローバル・コモンズ

岩村 水樹
(担当)総長ビジョン推進
コミュニケーション機能強化、組織能力向上

監事

吉田 民

棚橋 元

執行役・副学長

太田 邦史
(担当)学術長期構想、デジタル化
教育・学術ビジョン、入試企画、IR、ランキング

佐藤 岩夫
(担当)ガバナンス改革、利益相反、監査
人文社会科学組織連携、コンプライアンス総括補佐、研究力強化

佐藤 健二
(担当)学術資産活用戦略
文書館、高大接続センター、周年事業、総長ビジョン

武田 洋幸
(担当)コミュニケーション機能強化推進、入試改革
広報戦略本部

津田 敦
(担当)社会連携推進
渉外・卒業生、地域連携、体験活動、FLY、EMP

渡部 俊也
(担当)産学連携
産学協創、ベンチャー育成、リカレント教育改革、安全保障輸出管理

副学長

浅見 泰司
(担当)オンライン教育、デジタル化推進、キャンパス長期構想、大学総合教育研究センター

伊藤 たかね
(担当)ダイバーシティ教育

岸 利治
(担当)環境安全、TSCP、総合技術本部

坂井 修一
(担当)図書館

関村 直人
(担当) 国際特命、Tokyo Forum、Global Advisory Board 後継

丹下 健
(担当)卒業生、地域連携推進

吉村 忍
(担当)産学協創推進

副理事

稲垣 博明
(担当)協創活動企画調整、イノベーションコリドー

遠藤 勝之
(担当)研究倫理、研究費・研究不正対応

戸張 勝之
(担当)経理・調達

水上 順一
(担当)情報システム

山本 貴史
(担当)SDGs・社会実装

総長特別参与

沖 大幹
(担当)ネットゼロカーボン戦略

喜連川 優
(担当)DX推進戦略

坂田 一郎
(担当)FSIビジョン形成

藤原 帰一
(担当)国際関係

総長特任補佐

有馬 孝尚
(担当)財務改革、総長ビジョン検討、IR

小山 博史
(担当)DX戦略・研究力強化

川﨑 雅司
(担当)研究力強化推進

高橋 浩之
(担当)イノベーション戦略

津本 浩平
(担当)産学協創・研究力強化

中尾 彰宏
(担当)次世代サイバーインフラ活用

中村 宏
(担当)情報基盤活用

矢口 祐人
(担当)国際教育推進

横張 真
(担当)キャンパス計画

渡邉 聡
(担当)国際連携推進

割澤 伸一
(担当)産学協創・社会連携推進

新役員等の略歴と就任の挨拶

新理事・副学長、新副学長、新副理事の略歴および就任に当たっての挨拶を以下のとおり掲載します。

次の章

理事・副学長

相原博昭
AIHARA Hiroaki

昭和53年3月　本学理学部卒業
昭和56年10月　カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所研究員
昭和59年3月　本学理学系研究科博士課程単位取得の上退学
昭和59年4月　本学理学部助手
昭和59年11月　理学博士（東京大学）
平成 3年 8月　カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所物理部講師
平成3年10月　カリフォルニア大学ローレンスバークレー研究所物理部助教授
平成7年10月　本学理学系研究科助教授
平成15年4月　本学理学系研究科教授
平成24年4月　本学理学系研究科長・理学部長
平成26年4月　本学理事・副学長
平成27年4月　本学副学長
平成28年4月　本学大学執行役・副学長
専門分野：素粒子物理学実験
研究内容：1) H. Aihara, S. Adachi et al., "Observation of the top quark", *Physical Review Letters* 74 (1995): 2632-2637
2) H. Aihara, *Particle-Antiparticle Asymmetry in the B Meson System*. London: IOP Publishing, 2020.

経営企画、財務、社会連携・産学官協創等を担当いたします。藤井輝夫総長の率いる執行部は、2004年の国立大学法人化から数えて、4世代目の執行部となります。2027年の創立150周年に向けて、これまでに蓄積した資産とノウハウを基礎に、教育と研究のさらなる発展のために大学の機能強化を図る執行部だと思います。本学は、2020年に、広く投資家に購入を募る市場公募債を国内の大学として初めて発行しました。また、民間企業との産学連携、その大型版となる産学協創を精力的に進めてきました。これらの試みは、本学の教育・研究のための財務基盤を強化するとともに、社会とのより密接で直接的な対話を促進するものです。本学が生み出し蓄積した知の社会還元も加速しています。次の章には、これらの試みがよりグローバルになり、本学が、世界の公共性（the global public）により積極的に奉仕する「世界の東京大学」となる姿が記されると信じます。

私の任務は、その実現のために、よりグローバルな視点から経営、財務、社会・産学連携等についての様々な選択肢を総長、役員、そして科所長に提示し、決定されたことを着実に実行して結果を出すことだと思います。コロナ禍の逆境を乗り越えることも、the global public に奉仕することに他なりません。次の章は、より重厚で明るいものとなるでしょう。皆様のご支援とご指導をお願い申しあげます。

東京大学の、そして日本と世界の未来に向けて

理事・副学長

大久保達也
OKUBO Tatsuya

1983年3月　本学工学部化学工学科卒業
1985年3月　本学工学系研究科化学工学専攻修士課程修了
1988年3月　本学工学系研究科化学工学専攻博士課程修了、工学博士
1988年4月　九州大学工学部助手
1991年3月　本学工学部助手
1993年6月　米国カリフォルニア工科大学客員研究員
1994年8月　本学工学部講師
1997年10月　本学工学系研究科助教授
2006年4月　本学工学系研究科教授
2012年4月　本学総長補佐
本学「プラチナ社会」総括寄付講座教授
2014年4月　本学教育研究評議員、工学系研究科副研究科長
2017年4月　本学工学系研究科研究科長・工学部長
2020年4月　本学理事・副学長
専門分野：化学工学、ナノ材料化学、プラチナ社会
研究内容：1) Watcharop Chaikittisilp, and Tatsuya Okubo, "Zeolite and Zeolite-Like Materials", *Handbook of Solid State Chemistry*, volume 4 : Nano and Hybrid Materials, Wiley-VCH (2017) : 97-119.　2) Keiji Itabashi, Yoshihiro Kamimura, Kenta Iyoki, Atsushi Shimojima, and Tatsuya Okubo, "A Working Hypothesis for Broadening Framework Types of Zeolites in Seed-Assisted Synthesis without Organic Structure-Directing Agent." *Journal of the American Chemical Society* 134 (2012): 11542-49.
趣味：酒と旅

東京大学の、そして日本と世界の未来に向けて

藤井新総長の就任に際し、昨年度に引き続き、理事・副学長を拝命いたしました。本年度は総務、教育、施設、情報を担当いたします。また新型コロナウイルス対策タスクフォースの座長もつとめます。

人類の長い歴史の中、我々は大きな変化のときを迎えています。人類の活動が拡大する中、地球の有限性が顕在化、持続可能な社会の構築に向け、議論からアクションにステージが移行しています。東アジアを中心に少子高齢化が進行、我が国はいち早くその課題に直面しています。また、コロナウイルス感染は未だに終息の兆しが見えませんが、ポストコロナの時代においても、様々な制約を受け入れていかねばならないと考えます。歴史の展開期である今こそ、大学の出番です。本学はあらゆる分野のエキスパートが所属する、世界でも有数の大学です。全構成員が連携して、世界にビジョンを発信するとともに、アクションを起こして行きましょう。

五神前総長の最終年度に、理事・副学長として貴重な経験を積むことができました。これらの活動を通して、答えは現場にあり、構成員の所属や属性を越えた協調・連携が重要であることを改めて学びました。この経験を活かし、新執行部の一員として、全力で取り組む所存です。

私事ですが、昨夏還暦を迎えました。人生百年の時代です。大学に入学して以来四十余年、丁度折返し点です。人生の後半戦においては、これまで大学や社会から受けた様々なご支援に対し、恩返しする段階だと肝に銘じています。改めまして、何卒、よろしくお願い申し上げます。

大学というコーポレート

理事・副学長
齊藤延人
SAITO Nobuhito

昭和62年3月　本学医学部医学科卒業
昭和62年6月　東京厚生年金病院研修医
昭和63年1月　本学医学部附属病院研修医
昭和63年5月　富士脳障害研究所附属病院
平成元年9月　米国国立衛生研究所客員フェロー
平成3年11月　総合会津中央病院
平成5年7月　本学医学部附属病院医員
平成6年8月　本学医学部附属病院助手
平成12年11月　群馬大学医学部講師
平成14年7月　群馬大学医学部教授
平成18年2月　本学医学系研究科・医学部教授
平成27年4月　本学医学部附属病院長
平成31年4月　本学医学系研究科長・医学部長
専門分野：脳神経外科学、脳卒中、脳腫瘍
研究内容：1) Miyawaki S, Imai H, Shimizu M, Yagi S, Ono H, Mukasa A, Nakatomi H, Shimizu T, and Saito N. "Genetic variant RNF213 c.14576G>A in various phenotypes of intracranial major artery stenosis/occlusion." *Stroke* 44 (2013): 2894-2897.　2) Shono N, Kin T, Nomura S, Miyawaki S, Saito T, Imai H, Nakatomi H, Oyama H, and Saito N. "Microsurgery Simulator of Cerebral Aneurysm Clipping with Interactive Cerebral Deformation Featuring a Virtual Arachnoid." *Oper Neurosurg* 14 (2018): 579-589.
趣味：Netflix

この度、理事・副学長を拝命し、研究、懲戒、病院を担当することとなりました。よろしくお願いいたします。

これまで五神総長の時代に医学部附属病院長を4年間、医学系研究科長を2年間務めさせていただきました。病院は大学の中でも収益を生み出すわかりやすい現業部門です。特に国立大学法人化を契機にその経営は大きく様変わりし、病院収入は法人化前に比較して倍増し500億円に達しようとしています。

ご存知のようにこのような動きは大学本体にも求められており、時代は大学に単なる教育と研究の場だけではなく、新たな経営体に脱皮することを求めています。例えば製薬会社は、何万という薬の候補の中から候補薬を絞り、少数の薬剤を商品として開発し、利益を求めて企業としての形態を維持するわけですが、この方式は大学には馴染みません。一点集中ではなく、巨大なシンクタンクとして学問の裾野の広がりを維持し、未来に投資するために多様な人材を擁する集団でもあるべきです。一方で、そのような大学だからこそ、社会における役割を果たせる事業もあるはずです。大学がどのようなコーポレートに脱皮していくのか、私の役割は主に研究の活性化の面から検討を加え、藤井新総長をお支えしたいと思います。皆さまのご指導とご支援をお願いいたします。

経営体としての学問をする場

理事・副学長
藤垣裕子
FUJIGAKI Yuko

昭和60年3月　本学教養学部基礎科学科第二（システム基礎科学科）卒業
平成2年3月　本学総合文化研究科広域科学専攻博士課程修了（学術博士）
平成2年4月　本学教養学部基礎科学科第二助手
平成8年10月　科学技術庁科学技術政策研究所主任研究官
平成12年4月　本学総合文化研究科助教授
平成22年1月　本学総合文化研究科教授
平成25年4月　本学総長補佐
平成27年4月　本学総合文化研究科副研究科長・教養学部副学部長
平成28年4月　本学教育研究評議員
専門分野：STS（科学技術社会論）、科学技術政策、科学計量学
研究内容：1) 藤垣裕子（責任編集）、『科学技術社会論の挑戦（第Ⅰ巻～第Ⅲ巻）』、東京大学出版会、2020　2) Fujigaki, Yuko (editor), *Lessons from Fukushima: Japanese Case Studies on Science, Technology and Society*, Switzerland: Springer, 2015.
趣味：ネコとのんびりすること

このたび、理事・副学長を拝命いたしました。学生支援、入試・高大接続、評価、研究倫理を担当いたします。現在、大学のマネジメントは「運営」から「経営」へと大きく舵を切ろうとしています。その時大事なことは、変革を駆動する大学として、変えなくてはならないものと変えてはいけないものとの境界の見定めです。変えてはいけないことは、人類の知的遺産の継承の側面です。ヒトは他の動物と異なり、文化や教育・学習を通じた世代間情報伝達機構をもちます。大学で学ぶことの人類にとっての意味は、知的遺産の継承の担い手になることであり、大学とは人類が生み出してきた世代間情報伝達装置のうちで重要なものの1つです。

そう考えると、経営体とはいっても、ふつうの企業のように採算の取れない部門は切り捨ててしまうといった施策は決して取ってはならないことがわかります。学問は何のためにあるのか、地球環境と共存しながら人類が存続するために築いてきた知的遺産を次世代にどう引き継ぐかを常に考える必要があります。

経営体としての大学を議論する場である総合科学技術イノベーション会議や産業競争力会議での語彙と、これまで学内で綿々と引き継がれてきた学問の語彙との間のギャップに時に当惑を覚えながら、しかし同時に藤井新総長のとなえる「インクルージョン」「共感」「行動変容」といったSTSにも通じる言葉に希望を抱きながら、「経営体としての学問をする場」をどう構築していくか考えていきたいと思っています。

バリアフリーでインクルーシブなキャンパスへ

理事・副学長
林 香里
HAYASHI Kaori

1987年3月　南山大学外国語学部英米科卒業
1988年8月　ロイター通信東京支局勤務（～1991年）
1995年3月　本学社会学研究科修士課程修了
1997年4月　本学社会情報研究所助手
2001年7月　本学人文社会研究科より博士号（社会情報学）取得
2002年10月　ドイツ・バンベルク大学第2社会学講座フェロー（フンボルト財団）
2004年3月　本学社会情報研究所助教授
2004年4月　（組織統合に伴い）本学情報学環准教授
2009年9月　本学情報学環教授
2012年4月　本学総長補佐
2015年4月　本学情報学環副学環長
2016年4月　米国ノースウェスタン大学客員研究員（安倍フェロー）
2019年4月　本学総長特任補佐
専門分野：ジャーナリズム研究、マスメディア研究
研究内容：1)『<オンナ・コドモ>のジャーナリズム　ーケアの倫理とともに』 岩波書店、2011年　2)『メディア不信　何が問われているのか』岩波新書、2017年
趣味：市場巡り。世界のキオスクで新聞を買うこと。

今年度から国際・ダイバーシティ担当の理事・副学長となりました林香里です。

いま、東京大学のキャンパスでは、日本人男性という圧倒的なマジョリティに比して、女性、外国人、障がいのある方などがマイノリティとなっている構図があるように思います。しかし、これらのマイノリティの側から立ち現れてくるさまざまな課題は、よく見るとキャンパスのコミュニティ全体の課題でもあります。それは、多言語化の問題だったり、会議や研究会の風通しのよさや透明性だったり、キャンパスの施設改善やデジタル化の一層の充実だったり――実はこれらはマイノリティのための施策に留まらない、大学構成員全員に資するものです。

この度、私にいただいた職責は、国籍、言語、文化、人種、性別、年齢等の違いにかかわらず、一人ひとりが安心して楽しくキャンパスに集い、存分に才能を発揮できる、文字通りバリアフリーでインクルーシブなキャンパスをつくることだと考えます。そのことはすなわち、東京大学のキャンパスを、発信力があり、グローバルでユニークな革新的コミュニティへと変革することにつながると確信しています。

インクルーシブなキャンパスづくりは、私一人では到底達成できません。学生のみなさん、職員のみなさん、教員のみなさんのご支援・ご協力を仰いでまいります。なにとぞよろしくお願いいたします。

「誰もが働きたくなる大学」に

本学理事として事務組織、法務、人事労務を3年間担当させていただきましたが、4月からは藤井輝夫新総長の下で、コンプライアンスも担当することとなりました。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

本学には、基幹職、専門職、支援職の職制の下で、約5,000名のフルタイム勤務職員と多数の短時間勤務職員が在籍しています。一緒に働く職員の人数も職責も多様であり、勤務地も全国あるいは世界に広がっています。様々な状況にあっても、それぞれの職員が大学経営のプロフェッショナルとしての能力・専門性を高め、互いに協力できるようにすることで、多様性をチーム力に転換していくことが次の課題だと考えています。

藤井総長が掲げられる「対話」「DiversityとInclusion」「デジタル・キャンパス」はどれも職員の働き方に関わってきます。昨年11月の「東京大学職員のニューノーマルに向けた提言」を踏まえて新しい働き方をさらに進め、「誰もが働きたくなる大学」の実現に貢献してまいります。

理事
里見朋香
SATOMI Tomoka

平成2年3月　早稲田大学法学部卒業
平成2年4月　文部省入省
平成7年6月　米イェール大学大学院修士課程（国際関係論）修了
平成18年4月　本学企画調整役　兼　総長秘書室長
平成19年7月　京都大学教育推進部長
平成22年4月　（独）日本学術振興会審議役（基金担当）
平成24年1月　文部科学省科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課長
平成25年7月　文部科学省高等教育局大学振興課長
平成27年1月　文部科学省生涯学習政策局政策課長
平成29年4月　文部科学省大臣官房国際課長
平成30年4月　本学理事
専門分野：教育行政
趣味：名所旧跡美味めぐり、女性が主人公の映画鑑賞

地球規模課題に挑む大学を目指して

一向に収束しないコロナ禍は、爆発的な経済成長を遂げ科学技術で武装して無敵に見えた人類社会が、内部構造においていかに脆弱であったか、そのリスク管理がいかに未防備であったかを曝け出しました。歯止めのかからない温暖化もまた、現在の経済システムが、生態系を含む地球環境システムのキャパシティに衝突しているという、コロナ禍と同じ根源から発生しています。

日本は昨年10月に2050年脱炭素宣言を発し、世界の多くの国とともに、待ったなしの地球環境問題の解決に立ちむかおうとしています。この解決には、我々が慣れ親しんだ経済システムを大きく転換する必要があります。化石燃料から脱却して温暖化に歯止めをかけ、資源を循環させ、食料生産・消費を変えて生態系を保全し、人間活動が集中する都市をサステナブルにすることが必要です。そしてこれからの経済価値の創出は、この転換の中から生まれてきます。そのために、大学が伝統的な矩を超えて、産業界、官界、市民社会と協働し、個々の行動の変容を促し経済システム転換を通じて、地球環境――人類の繁栄を支える共通基盤としてのGlobal Commons――を守り、次世代に渡していく役割を担う必要があります。まず大学がグリーン・トランスフォーメーションの範を垂れることが大切だと思います。

理事
石井菜穂子
ISHI Naoko

昭和56年3月　本学経済学部卒業
昭和56年4月　大蔵省（現財務省）入省
平成4年7月　IMF
平成8年7月　Harvard Institute for International Development
平成9年12月　世界銀行
平成14年7月　財務省開発機関課長
平成18年6月　世界銀行
平成18年9月　国際協力学博士（東京大学）
平成22年8月　財務省副財務官
平成24年8月　GEF（地球環境ファシリティ）CEO
令和2年8月　東京大学教授、グローバル・コモンズ・センター ダイレクター
専門分野：開発経済学、地球環境
研究内容：1) 石井菜穂子『政策協調の経済学』日本経済出版社、1990年　2) 石井菜穂子『長期経済発展の実証研究』日本経済出版社、2003年
趣味：マラソン、スキューバダイビング

対話と共感に基づくよりひらかれた東京大学へ

この度、総長ビジョン推進担当の理事を拝命いたしました。対話と共感、そしてよりひらかれた大学という藤井総長のお考えのもと新たなビジョンの実現に尽力してゆきたいと考えております。

昨年来のコロナ禍は、日本そして世界の課題を浮き彫りにし、新たな価値観、社会・経済の仕組み構築に向けた変化を一気に加速させています。私はグーグルで日本及びアジア太平洋地域を担当していますが、こうした変化の局面にあって、より良い世界の構築のために、東京大学が果たす事ができる役割は極めて大きいと感じています。東京大学には高い志をもった学生、先生、そして職員の方々が集まっています。この力を日本、そして世界のよりよい変化へとつなげてゆくために、これまで以上に様々なステークホルダーと対話し、共感をもって変化をリードしてゆくことが求められていると思います。

そのためには東京大学が、多様な人々が集まり、新たなイノベーションや価値観を醸成する場であることが重要です。そしてそのためのカルチャー、なかでも「心理的安全性」が成立する環境を教育、研究、そして大学経営・運営の場でつくってゆくことがもとめられています。またこうした姿勢を社会や世界に発信し、東京大学を世界のブランドとして確立することと、東京大学に関わるすべての人々が誇りと帰属意識を持つブランドとすることがもとめられているのではないでしょうか。

微力ではありますが、東京大学が、世界の課題解決を牽引し、世界の中の日本の新たな位置づけを獲得することに貢献ができる存在となるよう皆様と一緒に取り組んでまいりたいと思います。

理事
岩村水樹
IWAMURA Miki

・本学教養学部卒業後、株式会社電通を経て、スタンフォード大学経営大学院（MBA）修了
・日本大学法学部准教授を経て、2007年4月グーグル入社
・グーグルバイスプレジデントアジア太平洋地域・日本マーケティング担当（現職）
・2018年5月より株式会社ローソン社外取締役
専門分野：マーケティング、ブランドマネジメント、イノベーション組織
主な著作：『ワーク・スマート』中央公論新社、2016年　『グーグルと考えるマーケティングの未来』（編著）DiamondHarvard Business Review online，2015年　『はじめてのマーケティング』（共著）日本経済新聞社、2005年　『ブランド構築と広告戦略』（共著）日本経済新聞社、2000年

公共財としての役割と社会との対話

2020年9月に監事として着任いたしまして、約半年が経ちました。

今までは公認会計士として多くの企業や私立の学校法人に関わってまいりましたが、国立大学に携わるのは初めてです。様々な会議や部局長の先生方とのディスカッションを通じて、本学の取組みは常に社会やより良い未来を意識して行われており、まさに公共財としての大きな役割を果たしていることを実感しております。人類社会はここ数年で急激な変化を遂げておりますが、資源の乏しい日本にとって、知と人間の創造力はますますその重要性を増し、本学に期待される役割もさらに広がっていくことと思います。コロナ禍でいろいろな制限もありますが、学生の皆さんには、大学生活を通じて広い学問分野に触れ、多くの人に出会い、様々な経験を積むことにより、好奇心旺盛で能動的な社会人として巣立って行っていただきたいと思います。

本学は、学生、保護者、卒業生、地域の皆様、受託研究や共同研究を行う企業、ご寄付をいただく方々など多くのステークホルダーに支えられていますが、昨年度は大学債の発行により、投資家という新たなステークホルダーも増えました。本学の行う様々な活動をぜひより多くの皆様に知っていただき、ステークホルダーへの説明責任を果たせるよう、監事として微力ながら貢献していきたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

監事
吉田 民
YOSHIDA Tami

昭和63年３月　横浜国立大学経営学部卒業
昭和63年10月　中央新光監査法人
平成19年８月　新日本監査法人
平成24年１月　学校法人根津育英会武蔵学園
平成27年４月　株式会社The Cream of the Crop & Company
令和２年９月　本学監事
趣味：卓球、バスケット制作

本学のポテンシャリティの高さに期待

昨年9月に監事を拝命いたしました。私は、本職が、M&Aなどの企業法務を中心とする弁護士業務で、また所属事務所のマネジメント（経営業務）を担当していることもあり、非常勤となります。就任当初は、参加すべき会議の多さに少々面喰い、それも大学独特の呼称のものが多く、しかもコロナ禍でオンラインということもあり、参加者のイメージがつかみ切れませんでしたが（私の不勉強が主因です）、半年近く経ち多少は慣れてきたところです。

偶々この短期間に、総長選考や初めてのガバナンスコードへの適合状況の公表など、大学の経営を担うガバナンス態勢の在り方を考える出来事があり、民間企業とは異なるステークホルダーの多様性や、学内の構成員からの支持・信頼の重要性などを認識しているところです。他方、監事監査の一環で、各部局のトップの方と面談する機会があり、そこでは監査事項の問答にとどまらず、先生方や部局の専門分野に関することにも話題が及び、とても知的に刺激的で楽しくあるのですが、これを通じて改めて感じ入るのが、幅広い分野に亘る本学のポテンシャリティの高さです。

現在、社会の分断への懸念を始め、世界においては大小さまざまな課題がありますが、大学はそれに対して今後の道筋を議論し、未来を示すことができる場であると思います。本学のポテンシャリティを結集すれば、必ずやどのような難題であっても解決の方向を示せるのではないかと信じております。

監事
棚橋 元
TANAHASHI Hajime

平成２年３月　本学法学部卒業
平成４年３月　司法研修所卒業（44期）
平成４年４月　森綜合法律事務所入所
平成８年６月　米国ハーバード大学法学部大学院卒業
平成８年９月　米国ニューヨーク市Davis Polk & Wardwell法律事務所で執務
平成９年９月　米国パロアルト市Wilson Sonsini Goodrich & Rosati法律事務所で執務
平成13年１月　森綜合法律事務所（現 森・濱田松本法律事務所）パートナー
令和２年９月　本学監事
研究内容：1) 田中亘／森・濱田松本法律事務所編『会社・株主間契約の理論と実務』株式会社有斐閣2021年（共著） 2) 森・濱田松本法律事務所編『M&A法大系』株式会社有斐閣 2015年（編著）
趣味：テニス、ゴルフ、プロ野球観戦（@甲子園）

東京大学のデジタル化によるアップデート

この度、学術長期構想、大学DX化、IR、ランキング、入試企画を担当する執行役・副学長を拝命いたしました。新型コロナウイルス感染症の影響で、大学も未曾有の変革の荒波に揺られています。我が国は幾多の大きな危機を乗り越え、アップデートを繰り返してきた国ですが、長期的な経済活動の低迷に加え、少子高齢化、さらには環境変動や社会の分断などの世界的な社会変動の動きに大きな影響を受けています。大学はコロナ禍の問題だけでなく、これらの中長期的な課題解決にも取り組んで行く必要があります。

私が担当する項目は、いずれも今後の東京大学の発展に重要な改革に関わる事項です。新たにスタートする藤井新執行部のメンバーとして、これらの改革を着実に進めていきたいと考えています。しかし、東京大学は歴史のある大学であるが故に、情報システム一つをとっても「複雑に絡み合った紐」のような状態であり、なかなか大変な作業であると認識しています。したがいまして、これらの改革には多くの教職員の方々の協力が不可欠です。皆様のご意見を聴取しながら、大学全体にとって益のある仕組み構築していきたいと思います。とくに大学が保有する無形資産をどのように顕在化し、有効活用できるかが鍵であると考えています。どうぞ、よろしくお願いいたします。

執行役・副学長
太田邦史
OHTA Kunihiro

昭和60年3月　本学理学部生物化学科卒業
平成２年３月　本学理学系研究科生物化学専攻博士課程修了、理学博士
平成２年４月　日本学術振興会特別研究員
平成３年４月　理化学研究所・研究員
平成12年4月　理化学研究所・研究ユニットリーダー
平成12年8月　理化学研究所・副主任研究員
平成18年4月　理化学研究所・太田遺伝システム制御研究室・准主任研究員
平成19年4月　本学総合文化研究科・教授
平成28年4月　本学総長補佐
平成29年4月　本学総合文化研究科・副研究科長
平成30年4月　本学総長特任補佐（IR担当）
令和元年4月　本学総合文化研究科長・教養学部長
専門分野　分子生物学、合成生物学
研究内容:1) H. Seo他5名, "Rapid generation of specific antibodies by enhanced homologous recombination" *Nature Biotech.*, 23:731(2005). 2) K. Hirota他5名, "Stepwise chromatin remodeling by a cascade of transcription initiation of non-coding RNAs." *Nature*, 456:130(2008).
趣味：テニス、芸術鑑賞

現場の力を活かし、多様性から新たな学知を生み出す

執行役・副学長
佐藤岩夫
SATO Iwao

昭和56年3月　東北大学法学部卒業
昭和57年4月　東北大学法学部助手
平成４年４月　大阪市立大学法学部助教授
平成12年3月　博士（法学）学位取得
平成12年10月　本学社会科学研究所助教授
平成17年10月　本学社会科学研究所教授
平成26年4月　本学社会科学研究所副所長
平成30年4月　本学社会科学研究所所長
専門分野：法社会学
研究内容：1) 佐藤岩夫・濱野亮（共編著）『変動期の日本の弁護士』日本評論社，2015年.　2) 東京大学社会科学研究所・大沢真理・佐藤岩夫（共編著）『ガバナンスを問い直す[Ⅰ][Ⅱ]』東京大学出版会，2016年.
趣味：建物鑑賞、山歩き

この度、執行役・副学長を拝命しました。ガバナンス改革、利益相反、監査のほか、人文社会科学組織連携、研究力強化等を担当します。

私が所属する社会科学研究所の基幹事業である全所的プロジェクト研究「ガバナンスを問い直す」(2010-2015年度）の運営を中心メンバーの一人として担いましたが、期せずして、今回は大学のガバナンス改革を担当することになりました。国立大学法人に関わる多様なステークホルダーの役割を明確にし、対外的にも説明可能なガバナンス体制を構築する必要がありますが、その際、言うまでもなく、大学の強みは教育・研究の現場の力にあり、現場の持つ多様性や自主性を最大限発揮させることが大学ガバナンスの要諦と心得ます。

一方、人文社会科学振興および研究力強化も、日本を代表する研究大学である東京大学の重要な課題です。研究力強化にとっては、文系・理系、基礎・応用にまたがる研究分野の多様性、ジェンダーや国籍など研究主体の多様性といった、さまざまなレベルで多様性を実現していくことが重要です。その上で多様性が個々の蛸壺化に陥らず、相互の対話と協働を通じて新たな学知を生み出していくことに、総合大学としての東京大学の強みがあり、また使命であると考えます。

藤井新総長のリーダーシップの下、微力ではありますが、新執行部の一員として東京大学のさらなる発展に貢献できれば幸いです。

東京大学の歴史の厚みのなかで未来を考える

執行役・副学長
佐藤健二
SATO Kenji

昭和54年3月　本学文学部卒業
昭和58年3月　本学社会学研究科博士課程中途退学
昭和58年4月　本学教養学部助手
昭和61年4月　法政大学社会学部専任講師
昭和63年4月　法政大学社会学部助教授
平成6年10月　本学文学部助教授
平成17年3月　博士（社会学）学位取得
平成17年4月　本学人文社会系研究科教授
平成23年4月　本学人文社会系研究科副研究科長
平成29年4月　本学人文社会系研究科長・文学部長
平成31年4月　本学大学執行役・副学長
専門分野：歴史社会学・メディア史
研究内容：1) 佐藤健二『文化資源学講義』東京大学出版会、2018年　2)佐藤健二『真木悠介の誕生：人間解放の比較＝歴史社会学』弘文堂、2020年
趣味：ひとがあまり読まない本を読むこと

藤井総長のもとで、あらためて執行役・副学長を拝命しました佐藤健二です。五神前総長の最後の2年間、文書館長・高大接続研究開発センター長・150年史編纂室長を務めておりました。その職務を継続するとともに、総長ビジョンのタスクフォースの座長として、全学から選りすぐりの教職員の力を借りて、職務にあたっています。多くの方々のお力添えをお願いすることになろうかと思います。どうぞよろしくお願い申し上げます。

ちょうど藤井総長の任期の最終年が、東京大学創立150周年にあたるというのは、偶然ながら無視できない意義があろうかと思います。文書館は、もともと100周年記念の歴史編纂事業の「遺産」ともいうべき資料群から育ってきた大学公文書館でした。文書館の未来に向けたあるべき姿と、150年史編纂室の現在のプロジェクトとは、深くからみあっています。後世から参照されうる記録を整備しつつ、現代の人びとにいかに発信していくかが問われていると、理解しています。デジタル化とインターネットの時代の文書館のあるべき姿は、決してオンラインの充実だけでなく、「博物館」ならぬ「博文館」としての空間を備え、歴史の厚みを肌で感じつつ、未来を考える場でなければなりません。

そのときどきの社会の変化と向かい合って、観察と実証の方法論を発展させてきた社会学の研究者としての経験をもとに、力乏しくスタミナも不足しがちですが、貢献できたらと思います。

東京大学をさらに開かれた大学に

執行役・副学長
武田洋幸
TAKEDA Hiroyuki

昭和57年3月　本学理学部卒業
昭和60年2月　本学理学系研究科博士課程途中退学
昭和60年3月　本学理学系研究科助手
昭和62年5月　博士（理学）学位取得
平成２年４月　理化学研究所研究員
平成5年10月　名古屋大学理学部助教授
平成11年3月　国立遺伝学研究所教授
平成12年4月　本学理学系研究科教授
平成19年4月　本学理学系研究科長・理学部長
令和２年４月　本学副学長
専門分野：発生遺伝学、ゲノム科学
研究内容：1) Kazuki Horikawa他4名 “Noise-resistant and synchronized oscillation of the segmentation clock.” *Nature* 2006 Jun 8;441(7094):719-23.　2) Yusuke Inoue　他9名 “Complete fusion of a transposon and herpesvirus created the Teratorn mobile element in medaka fish.” *Nature Communications* 2017 Sep 15;8(1):551.

このたびコミュニケーション機能強化推進および入試改革担当の執行役・副学長、広報戦略本部長を拝命しました。これまで本部広報は、広報戦略2020（広報戦略2017年策定）に従って、大学の顔とも言うべきHPのリニューアル、研究者を伝える記事（UTOKYO VOICES）、英文プレスリリースの充実、等々、着実に進化してきました。

藤井総長は、「対話と共感」を掲げて、東京大学が、「世界中の誰もが来たくなる大学」となることを目指しています。そのためには、これまでの「広報」という、やや一方的な発想を改め、様々なステークホルダーと双方向のコミュニケーションを図ることが必要となります。広報戦略本部として、これまで築いてきた研究成果発信に加えて、大学のビジョン、教育理念・実践などを社会、若い世代、学内構成員と広く共有することに力点をおきます。分断されがちな社会において、大学がその懸け橋になることに貢献できれば幸いです。

学部入試は大学が受験生、教育関係者、そして社会へ発する重要なメッセージの一つです。私はこれまでの3年間、私は推薦入試（学校推薦型選抜）の実施と改革に深くかかわってきました。5年間の検証を元に令和3年度の推薦入試を抜本的に改革し（学校長が本学に推薦できる人数の増加など）、コロナ禍の中で一定の成果を得ました。今年度はその勢いをさらに伸ばす年となります。それには、前述のコミュニケーションが重要となり、こちらも進めて参りたいと思います。

対話と共感をめざして

この度、執行役・副学長を拝命しました。社会連携推進を担当いたします。東京大学における社会連携、すなわち社会からの要請の受容と社会への貢献は、東大憲章において教育、研究につぐ第3の柱として位置付けられ、活動の幅を広げてきました。私が本部長を務める社会連携本部は、基金などを扱う渉外活動、地域連携、卒業生、公開講座やEMPなどのリカレント教育を主な所掌事項としています。すなわち、大学と社会をつなぐ接点が社会連携です。社会連携が有効に機能するためには、大学が知や技術を一方的に提供するのではなく、ヴィジョンを共有しながら対話を行い、ともに新しい地球社会を作り上げていく意思を醸成していくことが必要です。我々は、卒業生、各種教育プログラム修了生、共同研究相手、産学協創、自治体との連携など巨大なネットワークを持っており、大学はそのハブです。これらのネットワーク、すなわちグレーター東大コミュニティが機能すれば、大学が社会を駆動する母体となることは可能と考えます。しかし、社会連携を推進するには、その資源が必要であり、それなしで推進することは、研究時間の劣化、教育の質的低下につながりかねません。社会連携は、社会の受容のもと、資金の循環をともなって成長させるべきものだと考えています。微力ではありますが、東京大学を支え新しい地球社会の仕組みづくりに少しでも貢献できればと思います。皆様のご指導をよろしくお願い致します。

執行役・副学長
津田 敦
TSUDA Atsushi

昭和57年3月　北海道大学水産学部卒業
昭和59年3月　本学農学研究科修士課程修了
昭和62年3月　本学農学研究科博士課程修了、農学博士
昭和63年11月　本学海洋研究所助手
平成８年４月　水産庁北海道区水産研究所室長
平成15年４月　本学海洋研究所助教授
平成23年４月　本学大気海洋研究所教授
平成25年４月　本学総長補佐
平成27年４月　本学大気海洋研究所所長
専門分野：生物海洋学
研究内容：1) Tsuda, Atsushi　他25名 " A mesoscale iron enrichment in the western subarctic Pacific induces large centric diatom bloom ." *Science* 300 (2003): 958-961.
趣味：バードウォッチング

産学連携活動をよりグローバルに

産学連携担当の執行役・副学長を拝命いたしました。東京大学の産学連携は、「大学」、「大企業」、「ベンチャー企業」と「金融機関」からなる4者間の「知識」、「人」、「資金」の循環からなるエコシステムを拡大することを目指して取り組んできました。これら一連の活動を産学協創と称し、具体的な試みとして組織間連携、共同研究の推進、ベンチャー育成や技術移転といった多様な活動を展開してまいりました。

このような試みの結果、東京大学の企業との共同研究金額は100億円を超え、関連ベンチャー企業数も400社を超える規模まで成長してきました。日本国内の大学では屈指の規模に成長したと言えますが、海外大学と比較するとまだ大きな差異があると言わざるをえません。東京大学の産学連携活動の多くが国内市場を目指したものにとどまっている限り、米国等とのGDP比などを鑑みても成長に限界があることは明らかです。

このような背景から、新体制のもとでは、産学連携活動の一層のグローバル化を早急に進めていく必要があると考えております。新型コロナ感染症パンデミックは図らずも産学連携やベンチャー投資活動の急速なデジタル化を招きましたが、そのなかで社会のデジタルトランスフォーメーションに伴う新たな機会も生まれています。またカーボンニュートラルを早急に実現するためのグリーントランスフォーメーションも待ったなしとなるなか、これらに向けたイノベーション活動の加速が望まれています。この機をとらえ、本学の産学連携活動の一層のグローバルな発展を、積極的に進めてまいりたいと思います。

執行役・副学長
渡部俊也
WATANABE Toshiya

昭和59年3月　東京工業大学無機材料工学専攻修士課程修了
平成６年３月　東京工業大学無機材料工学専攻博士課程修了(工学博士)
平成10年4月　本学先端科学技術研究センター客員教授
平成13年4月　本学先端科学技術研究センター 教授
平成24年4月　本学未来ビジョン研究センター教授
平成26年4月　本学産学協創推進本部 本部長
平成28年4月　本学大学執行役・副学長
専門分野：知的財産・イノベーション
研究内容：1) T. Watanabe他2名. “Determinants of Patent Infringement Awards in the US, Japan, and China: A Comparative Analysis” World Patent information 60,101947(2020)　2) T. Watanabe 他2名 “Empirical analysis of the effect of Japanese university spinoffs’ social networks on their performance” Technological Forecasting and Social Change,80(6) 1119 - 1128 (2013)
趣味：能楽鑑賞

ダイバーシティ教育の充実を目指して

副学長
伊藤たかね
ITO Takane

昭和53年3月　本学文学部卒業
昭和59年3月　本学人文科学研究科博士課程単位取得退学
昭和59年4月　武蔵大学人文学部専任講師
昭和61年4月　武蔵大学人文学部助教授
平成元年4月　本学教養学部助教授
平成８年４月　本学総合文化研究科助教授
平成11年2月　本学総合文化研究科教授
令和３年４月　本学情報学環特任教授
専門分野：言語学・英語学
研究内容：1)伊藤たかね・杉岡洋子（共著）『語の仕組みと語形成』研究社, 2002年.　2)長谷川寿一・C.ラマール・伊藤たかね（共編著）『こころと言葉ー進化と認知科学のアプローチ』東京大学出版会，2008年.

このたび、副学長としてダイバーシティ教育を担当することになりました。東京大学の、特に学部教育はリベラル・アーツ教育を重視しています。ダイバーシティ教育はその中心的な柱の一つのはずでありながら、これまで本学の弱点の一つとなっており、これを強化することが喫緊の課題です。この極めて重要な、しかし困難なミッションの遂行に力を尽くしていきたいと思います。

人の行動には無意識のうちの前提があります。異なる前提に立つ人々と出会い、相互に違いに気づき、その違いを尊重することによって互いに視野を拡げていく、そういう経験を日常生活の中で繰り返す場を提供することが、否応なく「グローバル化」していく現代社会において指導的な役割を果たしうる人材を養成するために、必要不可欠だと考えています。しかし残念ながら、今の東京大学のキャンパスはそのような場にはなっていません。

ダイバーシティ教育が浸透すれば、キャンパスは誰にとっても居心地の良いものになり、これまで東京大学に入りたいと思わなかった人たちも来てくれるかもしれない。そうすれば、自ずと多様性を体験できるキャンパスが生まれ、ダイバーシティ教育は充実していく。ダイバーシティ教育担当として、国際教育と手を携えて、このような望ましい循環を引き起こすきっかけを作りたいと考えています。皆様のお力添えを、どうぞよろしくお願いいたします。

巨大組織を支える活動の継続と改善

副学長
岸 利治
KISHI Toshiharu

平成2年3月　本学工学部卒業
平成4年3月　本学工学系研究科土木工学専攻修士課程修了
平成5年6月　本学工学部助手
平成8年11月　本学工学系研究科講師
平成11年5月　本学工学系研究科助教授
平成12年5月　本学生産技術研究所助教授
平成21年8月　本学生産技術研究所教授
平成27年4月　本学生産技術研究所副所長
平成30年4月　本学生産技術研究所長
専門分野：コンクリート機能・循環工学
研究内容：1) Ueda, Hiroshi., Sakai, Yuya., Kinomura, Koji., Watanabe, Kenzo., Ishida, Tetsuya. and Kishi, Toshiharu. "Durability design method considering reinforcement corrosion due to water penetration." *Journal of Advanced Concrete Technology* Vol. 18 (2020): 27-38.
趣味：旅行、風流

この度、環境安全・TSCP・総合技術本部担当の副学長を拝命いたしました。環境安全本部は、教育研究活動における安全衛生の確保、事故災害の防止、安全意識の向上等に取り組んでいます。物事が上手く進んでいる時には、あまり意識されないかもしれませんが、多様な構成員からなる巨大組織で重要な役割を担っています。最近、教養学部生向けの学術フロンティア講義「環境安全衛生入門」で教育にも貢献していることを知りました。TSCPは、UTokyo Sustainable Campus Projectの略で、低炭素化キャンパスの実現に向けて、2008年より機器の高効率化改修等に取り組んでいます。昨年度から、全学を挙げて、地球という人類の共有財産（グローバルコモンズ）の保全と責任ある管理に向けた新たな取組みが始まる中で、TSCPの取組みも新たな局面を迎えていると認識しています。総合技術本部には2012年4月の設立当初から本部員として関わり、2017年度までの2年間は副本部長を務めました。全学の技術発表会や連絡会議が開催されるようになったことは大きな変化でした。昨年度、部局技術組織間の全学的な調整や学外組織との調整も期待される上席技術専門員の職が設けられたことを契機として、新たな展開を模索する時期を迎えているように感じます。微力ではありますが、少しでも本学の発展に貢献できればと存じますので、何卒よろしくお願いいたします。

地域と卒業生とのネットワーク

副学長
丹下 健
TANGE Takeshi

昭和57年3月　本学農学部卒業
昭和59年3月　本学農学系研究科修士課程修了
昭和60年3月　本学農学系研究科博士課程中途退学
昭和60年4月　本学農学部助手
平成5年12月　博士（農学）（東京大学）取得
平成７年１月　本学農学部助教授
平成12年6月　本学農学生命科学研究科教授
平成14年4月　本学総長補佐
平成23年4月　本学農学生命科学研究科副研究科長
平成27年4月　本学農学生命科学研究科研究科長・農学部長
専門分野：造林学
研究内容：1)丹下健・小池孝良(編著)『造林学　第四版』朝倉書店(2016)　2)Matsuzaki, Jun., Norisada, Mariko, Kodaira, Jun, Suzuki, Makoto, Tange, Takeshi. "Shoots grafted into the upper crowns of tall Japanese cedars (*Cryptomeria japonica* D. Don) show foliar gas exchange characteristics similar to those of intact shoots." *Trees* 19 (2005): 198-203.

このたび卒業生と地域連携推進担当の副学長を拝命いたしました。本学の活動に対する理解者を増やし、活動を社会に広げていくための基盤造りに貢献したいと思います。

本学では、多くの部局が地方自治体と協定を結び、地域連携の活動を行っております。2011年の東日本大震災で被災された地域の復興にも大学として支援して参りました。当事者意識を持って地域の皆さんと活動されている教職員の方々が多数おられることは、本学の大きな力であると思います。

世界中で活躍されておられる本学の卒業生・修了生とのネットワーク作りも大切です。本学では、東京大学オンラインコミュニティ（TFT）を組織し、卒業生等とのネットワーク作りに務めていますが、まだ十分な組織化には至っていないと理解しています。私は、学生時代に運動部に所属していましたが、先輩や同期、後輩との関係は今も続いており、現役部員への支援も続けています。学生時代にどのような経験をしたのかが、大学への関心や愛着を持ち続けるかを決めるのではないかと思います。本学では、知のプロフェッショナルの育成を目指して様々なプログラムが用意されています。学生の地域連携活動への参画も、本学が目指す社会変革への理解と社会の一員としての意識を深める機会として重要と思います。関連部署とも連携させていただき、本学のサポーターの拡大に取り組んでまいりたいと思います。皆様のお力添えをよろしくお願いいたします。

過去からの声、新しい声

皆様、こんにちは。副学長・附属図書館長を拝命した坂井修一です。どうぞよろしくお願いいたします。

今、日経新聞に「うたごころは科学する」を連載中（毎週日曜日文化面）です。ここで、私のタイトルは、「歌人・情報科学者」となっています（そういう人間です）。「館長任期の終わる日、『鷗外文庫』の前でパタっと死ねたら本望だ」と配偶者に言ったら、「『フランダースの犬』みたい」と笑われました。

図書館の役割は、この21世紀、実に幅広く奥深いものになっています。人類の知的資産を蓄え、必要な人に提供する機関というだけでは不足でしょう。過去から学び、新しい世界を築くための精神活動の場として、存在感を高めてゆく必要があります。近年では、オープンサイエンスの舞台という見方もありますね。

総合図書館は、長期に渡る改修工事を経て、昨年11月、グランドオープンしました。同時に、アジア研究図書館も開館しました。300万冊収容の自動書庫や、開館時のコンセプトを復活させた本館デザインなど、すばらしいものです。この2月に見学させていただいた折り、天窓から差す柔らかな光に包まれながら、本工事に関わられた多くの方々のご尽力に、改めて深く感謝申し上げた次第です。

ハード・ソフト両面で進歩を続ける図書館、ぜひご活用ください。皆様の教育研究に、そして学習に、これまで以上の貢献するべく、努力を続けたいと願っております。

副学長
坂井修一
SAKAI Shuichi

昭和56年3月　本学理学部卒業
昭和58年3月　本学工学系研究科情報工学専攻修士課程修了
昭和61年3月　本学工学系研究科情報工学専攻博士課程修了
工学博士
昭和61年4月　通商産業省工業技術院電子技術研究所　研究員
平成8年10月　筑波大学電子・情報工学系　助教授
平成10年4月　本学工学系研究科情報工学専攻　助教授
平成13年4月　本学情報理工学系研究科電子情報学専攻　教授
平成25年4月　本学情報理工学系研究科長（平成28年3月まで）
専門分野：情報理工学
研究内容：1) 坂井修一　『コンピュータアーキテクチャ』コロナ社(2004)　2) Shuichi Sakai, Masahiro Goshima and Hidetsugu Irie "Ultra Dependable Processor", *IEICE Transactions on Electronics* Vol. E91-C, No.9, (2008) pp.1386-1393,
学外活動：歌詠み。迢空賞など受賞。

とても重要なことの一つということ

このたび、研究倫理、研究費・研究不正対応担当の副理事を拝命いたしました遠藤でございます。

本学の教育・研究力は、世界でもトップレベルであることは、広く知られているところです。そのことを示す指標の一つとして、論文の作成数、その論文の引用数があるわけですが、仮に、その論文について疑念をもたれるようなことがあれば、それは大学として由々しきことになりかねません。

また、その教育・研究力を支えるうえでの、本学の財政基盤も大きなものですが、それは法令、規則、その他ルールに則った適切な取り扱いを要することも知られているところです。

本学は、教育・研究の自由というところにおいて、それらが健全に行われているということを、本学が組織として責任をもって発信するためにも、これまで研究倫理、研究費・研究不正というものについて、研修、その他様々な取り組みをもって繰り返し、本学の構成員の理解が深まるように注力してきたことと承知しております。

これまでのことを継承しつつ、今後の「研究倫理、研究費・研究不正対応」について、副理事として総長、理事及び副学長等のお役に少しでもたつことができればと存じますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

副理事
遠藤勝之
ENDO Katsuyuki

昭和62年12月　東京大学採用
平成22年4月　本学教養学部等経理課長
平成24年4月　本学監査課長
平成26年4月　本学薬学部・薬学系研究科事務長
平成28年4月　本学法学政治学研究科等事務長
平成31年4月　本学生産技術研究所事務部長

デジタルを活用したよりよい変革を

このたび情報システム担当副理事及び情報システム部長を拝命いたしました水上です。

情報システム部はこの4月から情報基盤センターの柏Ⅱキャンパスへの移転に伴い、柏に拠点を移しましたが、浅野地区には本学の重要なネットワーク機器や演習室があり、駒場や総合図書館にも重要な業務があります。これら業務を滞りなく遂行できるように尽力いたします。

2020年度はコロナ禍により私たちの生活、働く場所、働き方について正解のない状況の中でもがいた一年でした。情報というキーワードを持つセクションは大いに活躍し、大いに悩み、大いに疲弊しました。このうねりは収まることなく、これからも続くことと思います。オンライン授業、在宅勤務などの実践では多くの成果を得ましたが、同時に今まで見えていなかったことも見えてきました。これから、示された宿題をひとつひとつ解決していくことになります。いつかは終わると思いますが、ただ、その終わりはそんなに近くではなさそうです。

藤井新総長の行動指針のキーワードの一つにデジタル革新、DX（digital transformation ）があります。大学におけるDXはデジタルテクノロジーを活用して、大学教育、研究活動、社会連携ネットワーク、大学運営などを変革させるということです。今までの意識を変え、大学全体で進めることが重要であり、そのためには、みなさまの力が必要不可欠になりますので、ご支援、ご協力よろしくお願いします。

副理事
水上順一
MIZUKAMI Junichi

昭和54年4月　東京大学採用
平成22年4月　本学医学部附属病院管理課長
平成24年4月　本学情報戦略課長
平成27年4月　本学カブリ数物連携宇宙研究機構事務長
平成29年4月　本学情報システム部長
趣味：テニス、スポーツ観戦

退任の挨拶

前年度で退任された理事・副学長、理事、監事、大学執行役・副学長、副学長、副理事の挨拶を以下のとおり掲載します。

退任の挨拶――東京大学の未来への貢献の責任

前理事・副学長　**福田裕穂**

五神総長のもとで、4年間理事として、総務、入試・高大接続、評価、産学連携などの担当をしてきました。五神総長が目指した改革に共感し、お手伝いをさせていただいたのですが、この間、次々と想定外の新しい問題が勃発し、気の休まる時間はありませんでした。とはいえ、総長の前向きな姿勢、特に「ゼロサムではない」との呪文のおかげで、様々な問題にポジティブに対処することができました。特に印象に残っているのは、2021年度推薦入試での10年来の目標達成と、毎日が緊張の連続であった新型コロナウイルスへの対応です。忙しくはあったけれど、充実した毎日でした。

東京大学はリーディング大学として世界の知を先導する使命があります。五神総長の時代に、「社会を駆動する大学」の理念のもと、現実社会の改革に向けた活動を開始しました。今後もこの方針を堅持していただくとともに、ぜひ、より良い未来の創造を担う学生の育成にも力を注いでいただきたいと思っています。新型コロナウイルスの影響が続くなかでも、本学から未来を切り拓くすぐれた学生たちが次々と巣立っていくことを願っています。

東京大学の卓越した多様な研究に触れて

前理事・副学長　**宮園浩平**

2019年4月から2年間にわたって務めてきた理事・副学長の職をこの度無事に退任することになりました。この間、総長はじめ役員、関係の教職員の皆様にはたいへんお世話になりました。心より御礼申し上げます。

私にとって特に印象に残ったことは、東京大学では卓越した研究が多くの部局で進められ、顕著な成果が得られていることでした。多くの若手研究者が東京大学に集まり研究推進の原動力となっていること、連携研究機構などを通じて異分野間の融合が推進され、新たな研究活動の源流となっていることが印象的でした。研究担当理事となったことは私にとってたいへん幸運だったと思っています。

2020年春から新型コロナウイルス感染症が拡大し、私たちの教育・研究活動は大きく変化しました。こうした中でも東京大学が速やかに対応を行うことで教育・研究活動を継続することができたことは、関係者の皆様のご協力のおかげと考えます。またこの間、医学部附属病院・医科学研究所附属病院の一致団結した関係者のご尽力に、改めて感謝申し上げます。

東京大学が今後も大きく発展することを祈念して、退任のご挨拶とさせて頂きます。

国際と総長ビジョン広報を担当して

前理事・副学長　**白波瀬佐和子**

2年間、国際担当理事・副学長を務め、2019年度は広報、2020年度は総長ビジョン広報も担当しました。コロナ禍にあって、物理的な国際交流事業が事実上ストップする一方で、リモートの国際会議が増えました。そこで痛感したことは、新入生や若手研究者たちといった、まだ十分な信頼関係を築けていない者への国際的ネットワーク構築のための後押し・支援が極めて大切であることでした。総長ビジョン広報関連では、『学内広報』1499号（2017年8月25日掲載）から30回にわたり掲載された「総長室だより」に関わり、最も印象的だったことは総長が日進月歩で「進化」されていることでした。また、2017年11月に開催された、第1回グローバル・アドバイザリー・ボードミーティングにおいて、東大のジェンダー格差に対し厳しく指摘されたことに、決して目を背けようとはされませんでした。数値としての十分な成果がでるところまでには至りませんでしたが、国際展開の加速化とダイバーシティの達成に向けた総長メッセージを積極的に発信されたのは、GAB委員会を有効に活用されたことの証です。

2年間の任期を無事全うすることができたのは皆様のお陰です。ありがとうございました。

6年間東大改革に携わって

前理事　**境田正樹**

2015年4月から6年間にわたって理事を務め、コンプライアンス、監査、病院などを担当してまいりました。この間、様々な案件への対応にあたっては、本部・部局の教職員の皆様に大変お世話になりました。また、医学部附属病院、医科学研究所附属病院の皆様には、新型コロナウイルス感染症への対応について、献身的にご尽力いただきました。この場をお借りして、感謝を申し上げます。

私は在任中、スポーツ先端科学の推進についても取り組んでまいりました。2016年5月に創設されたスポーツ先端科学研究拠点（UTSSI）では、日本代表選手や強化指定選手等にもご協力頂きながら、競技力向上、コンディショニング強化、怪我予防等を目的とした研究プロジェクトが進められています。また、駒場、本郷、柏のキャンパス内の運動施設にハイテクカメラやフォースプレートなどのセンサーを備え付け、選手の運動データをリアルタイムで収集・解析するためのセンシングフィールドの整備も検討されています。この6年間で、東京大学とスポーツとの関係はこれまでになく深まったと言えます。

藤井総長のもとでの東京大学の一層の発展を祈念いたしまして、退任の挨拶といたします。

3月29日に福田理事と宮園理事が、30日に白波瀬理事と境田理事が、そして31日には五神総長が、教職員の拍手のなかで迎えの公用車に乗り込み、通い慣れた安田講堂を後にしました。大変お疲れ様でした。

監事を退任して半年がたちました

前監事　**澤井憲子**

私と服部監事の任期は約4年半あり、当初は十分長い時間だと思いました。しかしながら、コロナのせいで消化不良で終わった気持ちです。昨年の2月ごろから会議の形態が変更し、そのうち人生初めてのオンライン会議となり、総長も理事もテレビの中の人になったようでした。そして安田講堂も薄暗くなり、人の出入りも少なくなり、ついに入構するのにも入構アプリを示さないといけなくなりました。

コロナが広がる前までは、大学改革を目の当たりにみて、かつ大学の知にふれて、今までの生活、仕事とは全く違う世界に驚き、かつ感動しました。

振り返ってみて一つ残念だったのは、女子学生の数の点です。これは東大だけが努力すればよいという問題ではなく、日本の問題ではあると思いますが、東大として何ができるのか、今後も真摯に検討していただきたいと思います。

いつかコロナが落ち着いて自由に入構できるようになったら、散歩がてら秋のイチョウ、春の桜を見に行きたいです。新総長のもとで大学がますます発展し、日本の知、いや世界の知のよりどころとなることを願っています。

転換期の東大に在職して

前監事　**服部 彰**

昨年8月に4年5ケ月の任期を終えて退任致しました。在職中は役員、教職員の多くの皆様にご協力、ご助言を頂き心から感謝致しております。

振り返ってみると、私の在職期間はちょうど東京大学の大きな転換期の最中にあったのではないかと感じております。平成29年には創立140周年、東京帝国大学から東京大学となって70年の節目を迎えました。同年に総合図書館前広場の地下に自動書庫とライブラリープラザが完成しました。令和元年には長年の悲願であった国際宿舎がインターナショナルビレッジとして目白台に開設されました。大きな制度の変化としては平成29年の指定国立大学法人化があり、世界最高水準の教育研究活動が期待される国立大学として、より自由度の高い運営が出来るようになりました。エクステンション事業・コンサルティング等の対外的事業活動、資産運用や不動産の活用事業なども実施されるようになりました。

多くの改革が行われた中、女性の学生比率の向上策については様々な方法が検討されましたが、これは特に難しい課題と思いました。今回、令和3年度から女性の役員を過半数にするという画期的な試みにより、東大に新たな多様性の波が起きることを願っております。

五神改革――あっという間の改革

前大学執行役・副学長　**有信睦弘**

3年間本当にお世話になりました。研究倫理や安全保障輸出管理といった大学活動の基盤となる仕事を主とし、総長からの御下命の経営構造分析は、分析が追いつかない改革が進み、殆どなすすべもなしという状況。とても御期待には沿えませんでした。

予算会議によって運営費交付金の配分を透明化したこと、財源多様化に様々な手を打つ中での極めつけとしての大学債の発行、どちらもかつての東京大学では誰も手を付けることができなかった内容です。その他、若手教員や学生に対する支援、職員の働き方や制度の変更等、サポートされた方々の努力も大きかったと思いますが今後の東京大学の発展の礎になるものと思います。

私は4月から広島の新設県立大学に行きます。来広の機会には是非お立ち寄りください。学生の選抜、カリキュラム、学位認定とも新しい試みを進めています。東京大学での経験を活かしつつ新しい人材育成に取り組むことが大学や社会への恩返しと思いつつ。

10年来の新図書館構想が実現

前大学執行役・副学長　熊野純彦

2018年度より3年間、図書館担当の大学執行役を務めさせて頂きました。附属図書館は10年来、新図書館構想を進めて参りまして、在任中の最終年度、2020年の秋にようやく総合図書館のグランドオープンを迎えることができました。300万冊の収容能力を誇る地下自動書庫、共同的な学習・研究を可能とするライブラリープラザをはじめとする新館建築、また創建当時の趣きを可能なかぎり再現する本館修復と、大規模な工事が終了して、総合図書館は新たに生まれ変わったところです。総合図書館は、関東大震災の後、ジョン・ロックフェラー Jr.氏をはじめとする国内外からのご支援を受け、1928年に創建されたものですが、今回の大修繕工事によって、大階段、1階の記念室、3階の大閲覧室等々が、シャンデリアや天井などの意匠も含め、往時の威容を偲ばせるべく復元されました。もとよりこの構想は古田前々附属図書館長、久留島前館長が苦心を重ねてきたもので、私は偶々、事業の最終段階で図書館長を仰せつかったにすぎません。とはいえ、この間長きにわたりお掛けしたご迷惑、賜りましたご協力につきまして、事業完了に立ち会いました館長として深くお詫びし、また御礼を申し述べさせて頂きます。

国際化という永遠の課題

前大学執行役・副学長　羽田 正

私は五神総長の任期の2年目から、理事・副学長を3年、大学執行役・副学長を2年務めました。施設、IRの仕事に携わった時期もありましたが、継続的に担当したのは「国際」に関わる業務です。単に英語圏の大学の後を追うのではなく、イギリスの一企業による大学ランキングの基準や価値を必ずしもそのまま受け入れることなく、日本という場に位置する本学にふさわしい国際化とはどのようなものかを真剣に考えて、多くの教職員と相談を重ねながら東大型の「グローバルキャンパス」構築に力を注いできました。ご理解・ご協力・ご支援を頂いた学内外の皆様に心からお礼を申し上げます。

東京大学における教育研究は、世界の最先端に位置し、世界に開かれているべきです。しかし、同時に、国立大学である以上、日本とその国民のために裨益するものでなければなりません。グローバルとローカル、この二つのミッションを共存・調和させることは、口で言うほど簡単ではありません。日本と世界の変化に連動して、東京大学が追求する理想の姿もまた変わってゆくでしょう。国際化という永遠にも見える課題の海でどう舵を取るのか、新執行部の船出と挑戦に大いに期待しています。

ダイバーシティ＆インクルージョンの進展を願い

前大学執行役・副学長　松木則夫

理事として3年間、大学執行役として1年間務めさせていただきました。様々な業務を担当しましたが、その都度、教職員の皆様にお世話になり、またご迷惑をおかけしながらの4年間でした。この場を借りてお礼とお詫びを申し上げます。五神総長のもと、財務や人事システムなどの改革・透明化が進み、東京大学が文字通り運営から経営に舵を切った時で、歴史的にみても東京大学と社会との関わりが大きく動いた時に立ち会えたのは幸運でした。

4年間を通して男女共同参画・ダイバーシティに関わりました。私自身は、男女差別は決してしておらず、理解のある人間だが、東京大学の女性教員や女子学生が少ないのは自分のせいではないと思っていました。しかし、大多数を占める男性構成員が現状に疑問を持たず、大多数の考えや習慣で行動し続けていることが大きな問題であることに遅ればせながら気づきました。それからは、男性の意識改革、行動変容が必要だと機会を見つけて訴え続けてきました。皆さんの意識は確実に変わってきており、女性教員と女子学生入学者の割合が史上最高になったことは嬉しく思います。五神総長のもとで動き出したダイバーシティ＆インクルージョンが藤井総長のもとで更に進むことを期待いたします。

知の世界拠点として

前大学執行役・副学長　光石 衛

2017年より大学執行役・副学長として、担当した期間に長短はありますが、研究力強化、環境安全・環境安全本部、TSCP、総合技術本部、研究倫理、国際連携強化に携わりました。以下に主な活動をご報告いたします。(1)47の既存組織の改組・見直しによる研究組織の機能の向上、(2)「若手研究者の国際展開事業」の創設、延べ160名の採択と派遣、(3)プリンシパルURA、シニアURA、URAによる研究力強化の推進、(4)「環境安全衛生スローガン」創設による学内の安全意識の向上と醸成、(5)東京大学化学物質・高圧ガス管理システム(UTCIMS)の運用の推進、(6)4年間累計CO_2排出量約7.8万t- CO_2、光熱費約29億円の削減、(7)2021年3月世界8大学から成る「気候に関する大学アライアンス(GAUC)」のキャンパスアクション「キャンパスの脱炭素化に関する国際WS」の主催、(8)カーボンニュートラルに向けた本学の研究と社会貢献推進のためグローバル・コモンズ・センターとの連携開始、(9)2020年11月ケンブリッジ大学と合同シンポジウムの主催、「コロナ時代における教育の在り方」を討議。

微力ながら少しでも本学に貢献できたとすれば大変に光栄に存じます。東京大学が知の世界拠点としてより一層輝くよう、多様な分野で極めて優れた研究がますます進展することを祈念いたします。

退任にあたって

前大学執行役・副学長　**森山 工**

2018年4月から副学長、2019年4月から大学執行役・副学長を務め、この間、人文社会科学振興および教育関連の諸事案などを担当するとともに、2020年4月からは大学総合教育研究センターのセンター長を務めました。

とくに人文社会科学振興にあたっては、「人文社会科学」を「振興する」という施策が一種のアファーマティブアクションと化して、逆に「人文社会科学」という枠組みの固定性を強化するのではないかという危惧とともに、本学の人文社会科学の多様性と先進性を広く「可視化」することに対する積極的な意義を感じてきました。「ビジョン2020」最終年度となる昨年度には、人文社会科学振興ワーキング・グループ最終報告書を取りまとめ、本学における人文社会科学の「可視化」の取り組みを紹介すると同時に、今こそ「人文社会科学」対「自然科学」、すなわち「文系」対「理系」という学術区分を相対化し、広く本学の学術を包括的に把握する立場から学術振興を図るべきであるという提言を行いました（https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/about/actions/n03_wgreport_00001.html）。

微力ではありましたが、大学執行役・副学長としてのさまざまな業務をまがりなりも遂行しえたとすれば、それは五神前総長をはじめとする大学執行部の先生方、そして何よりも本部事務部の職員の方々のご理解と強力なご支援があったからです。ここに篤く御礼を申し上げます。

第三の途も探れ

前副学長　**相田 仁**

昨年度キャンパスデジタル化担当の副学長を務めさせていただきました。昨年度は新型コロナウィルスのため、本学でもオンライン授業やリモートワークを余儀なくされました。その結果、移動時間の制約がなくなって、講義や会議の出席率が向上するなど利点も多かったのですが、その一方で、構成員間の何気ない触れ合いがなくなり、孤独感を持つ人が増えるなどの問題もありました。これに対して、問題点にだけ着目して、新型コロナウィルスが収まったら元に戻すべき、という声も聞こえてきますが、オンライン化で生じた大きなメリットを捨て去るのは、もちろん得策でありません。また、一昨年度までのやり方と昨年度のやり方の良い点を組み合わせよう（いいとこ取り）、という考え方もありますが、これも最善とは言えません。なぜなら、昨年度は新型コロナウィルスに追われてどうすれば良いか良くわからないまま大慌てで行ったことが多かったからです。一年が経過して、本学のみならず、他大学、諸外国において、いわゆるグッドプラクティスがかなり蓄積されました。今後はこれらも参考にして、本学にとって最善の途を選択していくことに期待します。

ひたすら走りつづけた副学長としての２年間

前副学長　**岡部 徹**

2019年度から2年間、副学長・社会連携副本部長として、渉外活動や産学協創を担当しました。

渉外活動に関しましては、寄付集めの支援や組織マネジメントが主な仕事でした。自身の研究プロジェクトのための外部資金や寄付を集めるのは得意でしたが、全学のために一般の方に寄付をお願いする難しさを実感しました。本学のために、毎年、数十億円の寄付を集めて頂いております本学ファンドレイザーの方々のご努力には頭が下がります。

寄付集め以外の仕事としては、部局から本部に移管されたニューヨークオフィスの立ち上げや寄付金の運用等の各種制度設計に関わりました。今後は、海外での資金調達が活発になることを期待しております。

副学長に就任してから、体力増強と健康管理のため、はじめたランニングが習慣となり、毎月100km以上走るようになりました。在任中に、累計2400km以上走り、体形もシャープに大きく変わりました。仕事面でも、新しいことにチャレンジし続けましたので、名実ともに、ひたすら全力で走り続けた2年間でしたが、振り返りますと、きわめて充実した有意義な職務でした。

この2年間、皆様方からいただきましたご指導、ご支援に重ねて感謝申し上げ、退任のご挨拶とさせていただきます。

能動的な経営のための大学債

前副学長　**坂田一郎**

2015年度から総長特任補佐を5年間務めた後、昨年度は、副学長として、経営企画と企画調整を担当させていただきました。その中で最大の仕事は、「東京大学FSI債」の発行でした。日本で初めての大学債発行であり、また、ソーシャルボンドとして発行するため、前例の無い創造的な作業や市場との密な対話が必要でしたが、財務と渉外のみなさんや専門家の方々とチームを組んで一致協力して取り組み、実現することが出来ました。本学に対する社会からの期待に応えるためには、自ら戦略を立てて行動する能動的な経営体となりつつ、その役割を拡張していく必要があります。大学債という新しい枠組みは、それに欠かせない自由裁量度の高い先行投資資金を獲得するための切り札となりえます。また、新型コロナ禍の中、キャンパスを対面とリモートの双方で効率的な学びと研究が出来る場へと迅速にリフォームすることが求められています。大学債は、準備段階ではそれを想定したものではありませんでしたが、発行により、結果的に、それに必要な資金を適時に調達することが可能となりました。未来に向けて、本学がグローバルな公共財としての経営モデルを開拓しつつ、益々発展していくことを祈念しております。

働きやすい大学を目指して

前副理事　奥抜義弘

2015年10月に副理事に就任し、2016年4月に柏地区事務機構長、イノベーションコリドー担当となり、2019年4月からは主に業務改革推進・普及を担当、同年8月からは研究倫理等も担当させていただき、本年3月末をもちまして、副理事を退任いたしました。

この間、五神総長をはじめ役員・執行役の皆様、また多くの教職員の皆様方にご協力とご支援をいただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

柏キャンパスでの3年間は、事務機構長として柏キャンパス共同学術経営委員会委員長のもとでキャンパスの運営に携わり、また、柏Ⅱキャンパスに建設された本学の産学官民連携棟の設立に携わり、貴重な経験をさせていただきました。今後も柏Ⅰ、Ⅱキャンパスの益々の発展を期待しております。

最後の2年間は、主に業務改革推進・普及に取り組んでまいりましたが、コロナ禍により社会全体がニューノーマルな働き方が強いられる中、業務のデジタル化や在宅勤務に対応した働き方を考え、業務ツールの紹介や活用、業務改善提案を示してきました。今後、総長が述べているとおり東京大学が日本一働きやすい大学となっていくことを祈念し、退任の挨拶とさせていただきます。

異なる環境から多様性を学ぶ

前副理事　梶 正治

本年3月末をもちまして、副理事を退任いたしました。この間、五神総長はじめ、関係の皆様方には様々なご指導ご支援いただきながら、ダイバーシティ、女性活躍推進、働き方改革を担当させていただきました。

在任中は、松木大学執行役・副学長のもと特に本学のダイバーシティの改革等に取組んでまいりました。女性教職員の増加、女性活躍推進など本学の構成員が個々の違いを受け入れ、認め、各自の個性を活かして能力が発揮できるように、これが「普通」だと思えるようなキャンパスの環境を実現するために努力をしてまいりました。その中で本学の構成員の一人ひとりがダイバーシティの重要性を考え、意識を変えて行動することが性別役割分担意識や無意識のバイアス解消に繋がるとの思いで進めてきました。前例がなく手探りで進めていたこともあり、すぐには前に進まない面もありましたが、多様な分野の先生方とともにダイバーシティを推進するための活力を生み出す大変有意義な仕事をさせていただいたと思っております。これまでいただいたご指導、ご厚情に重ねて感謝申し上げ、東京大学がさらに発展されることを祈念しております。

副理事としての５年６か月を振り返って

前副理事　鈴木敏人

2015年10月に副理事を拝命してから5年6か月の間、経理調達、研究費・研究不正対応、研究倫理、柏地区整備を担当してまいりました。この間、経理調達担当としまして「会計事務の知恵袋（契約事例集）」の作成、研究費・研究不正対応担当としまして不正行為防止に関する取り組み、研究倫理担当としまして科学研究行動規範委員会規則の改正、そして、柏地区整備担当としましては柏キャンパス第Ⅳ期用地のグランド等整備計画に携わってまいりました。副理事就任の際の挨拶文で、担当業務を遂行していくには東大ビジョン2020に掲げられた「機動的な運営体制の確立」に観点を置くことが重要と考える旨を述べさせていただきましたが、この「機動的な運営体制」確立のもと、皆様からの多大なるご支援・ご協力があったからこそ、これら副理事としての担当業務を進めることができたと痛感しており、皆様には感謝の念に堪えません。未だコロナ渦の収束は不透明ですが、今後におきましても東京大学の「機動的な運営体制」のもとに、着実な教育研究活動、業務遂行がされていくものと確信し、東京大学の益々の発展を祈念いたしまして退任の挨拶とさせていただきます。

大学を真の経営体に

前副理事　平野浩之

2015年4月から6年間財務部長として、また2003年10月から2007年3月までの課長時代を含めますと、本学には9年半という長きにわたってお世話になりました。

課長時代に経験した「法人化」への移行も歴史的な転換期でありましたが、この6年間は運営から「経営」への激動期であったと思います。

予算配分制度の改革を皮切りに、財務レポートの作成と、それを元に「株主総会」と称して本学の財務状況をホームカミングデーにおいて説明することも実施してきましたが、3年前から「統合報告書」として更に発展し、社会からの一定の評価も得られてきたことは、各部局のご理解と関係者の努力の賜物であります。

また、指定国立大学となって、資金運用の高度化も実施してきましたが、財源の多様化として今後も期待しているところです。

そして、昨年10月には、わが国初となる「大学債」の発行にも携わることができましたことは、久々に達成感を味わうことのできた「しびれた体験」でした。

私の職業人生のほぼ四分の一を東大の管理職として過ごせましたことは、身に余る光栄であり、誇りであります。

東京大学が益々真の経営体として発展していかれますよう祈念しております。

令和2年度卒業式

令和2年度卒業式が、3月18日（木）に、安田講堂において挙行されました。今年度の卒業式は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて規模を縮小し、各学部から選出された約80名の参加によりおこなわれました。アカデミック・ガウンを着用した五神総長はじめ理事・副学長、理事、学部長並びに来賓の宗岡正二（むねおかしょうじ）東京大学校友会会長の列席のもと、10時に開式となりました。五神総長から各学部の卒業者代表に学位記が授与され、卒業者に向けて告辞が述べられた後、宗岡校友会会長から祝辞をいただきました。その後、2名の卒業生総代（理学部 吉田智治（よしださとし）さん、経済学部 佐藤大樹（さとうだいき）さん）が順に答辞を述べ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、卒業者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに学士の学位を取得し、卒業される皆さん、おめでとうございます。

特に新型コロナウィルス感染症の世界的蔓延という未曽有の事態に見舞われた中で、晴れてこの日を無事迎えられたことに、東京大学の教職員を代表して、心よりお祝い申し上げます。本年度は、10学部を合わせ、3,083名の方々が卒業されます。ここに至るまでの長い間、皆さんの学業と研究活動を支えてこられたご家族やご友人の方々のご支援に対して、深い感謝の意をお伝えしたいと思います。

卒業式は本学にとっても大切な行事であり、この安田講堂に皆さんやご家族の方々とともにお祝いしたいと願っておりました。しかし、残念ながら本年度も新型コロナウィルスの感染拡大を防止するために、このような形での卒業式になりました。本来の姿ではありませんが、様々な場所でライブ配信をご覧の方々とも心を合わせ、皆さんの卒業を祝いたいと思います。

私はこの3月末で6年にわたる総長の任期を終えます。皆さんは、私が総長として送り出す最後の卒業生となります。その最後の一年間、キャンパスでの活動が大きく制約される困難の中でしっかり学業に取り組まれたことに敬意を表します。このコロナ禍は、等しく世界中の大学を襲い、新たな経営の問題を浮上させました。私は今、世界の研究型大学11校の連合体IARUの議長を務めていますが、そのメンバーの学長の方々との会話から、今回の事態が世界中の大学に並々ならぬ困難をもたらしていることを感じています。とりわけ20世紀の終わりに市場化の波が押し寄せた、欧米の大学では、経済的なダメージが深刻です。授業料や寮費の収入が途絶え、一方で感染対策の対応の必要や研究教育への投資が増大するなか、経営資金を調達できるかが、教育研究活動の未来を決しているのです。世界を席巻してきた、学生を顧客ととらえる市場原理に基づく大学経営モデルに大きな疑問符が打たれ、経営モデルの転換を必死に模索しているのです。そうした中で東京大学が主張してきた、グローバルな公共財としての大学、社会の変革を駆動する大学という高い目線で大学を新たな経営体とするという構想は、世界から新鮮な理念として受け止められ、輝きを放ち、評価されているのです。

本日は、こうした東京大学の学問の場としての歴史と未来について、お話ししたいと思います。我々が積み上げてきた学問の蓄積の歴史を知ることを通じて、より良い未来を選び、望ましい社会を作りだしてもらいたいと思うからです。

大学の研究教育力の国際的評価において、英語一元化が急速に進んでいます。世界大学ランキング等で最近順位を上げているアジアの大学なども含め、評価の高い大学には、もっぱら英語で研究教育を行っている所が少な

くありません。もちろん、私たちも英語による発信力を高める努力を続けていますが、多様な学問分野において日本語による研究教育を基礎としている東京大学は、一見不利な立場に立たされているようにも見えます。しかし総長としての諸外国の方々との関わりを振り返ると、世界からの東京大学に対する尊敬や期待の根本にあるのは、ランキングの順位では現しきれないところにあると感じます。それは、各々の学問的課題について自らの生活言語である日本語で考え抜き、世界に通用する研究成果を挙げられるような学術の環境を作りあげてきたことにあります。

その努力の出発点を象徴するのが、東京大学の創立から4年後の1881（明治14）年に法学・理学・文学の三学部共同で刊行した『哲学字彙（てつがくじい）』です。英語やドイツ語の学術用語を、たとえば「惰性」「存在」「比率」などのように、複数の漢字を組み合わせた熟語に翻訳しています。幕末の蘭学に由来する言葉もありますが、明治初期に欧米の学知を取り入れる際に、日本語で表現し、自分たちの新しい言葉として使いこなし、消化吸収する努力が活発になされたのです。

しかしながら東京大学の設立当初はまだ、先進の欧米諸国から招いた外国人教師の、外国語による授業が中心でした。その頃の日本人教授の一人に、のちに総長になる山川健次郎がいます。会津藩に生まれ、戊辰戦争では白虎隊の隊士として、明治新政府と戦う立場にありました。白虎隊といえば飯森山の自刃の逸話が有名ですが、幼少組の山川健次郎は出陣とならず生き残りました。維新後に明治政府の派遣でアメリカに留学、イェール大学で学位をとって帰国しています。そして、本学最初の、物理学の日本人教授となったという異色の経歴です。その山川にとって、日本の学生が日本語で学問をする、というのは重要なことでした。総長として学生に伝えた訓示「学生諸君に告ぐ」において、当時列強による分割を繰り返されていたポーランドの例を引いて、「自國の学校で自國の言語を使用することさへ禁ぜられてある」情況の悲惨さを訴えています。私の専門も物理学ですが、基礎から最前線に至るまで日本語で書かれた教科書で学ぶことができました。最初に手にした量子力学の教科書は朝永振一郎先生によるもので、古典物理学からの導入が独特な名著です。この教科書は本学の小柴昌俊先生によって英訳されて海外で高く評価されています。現代物理学のもう一つの柱である統計力学も久保亮五先生の演習書が英語版になって世界で広く読まれています。物理学を学ぶ入り口において、基礎概念や数式の背後にある意味を自分なりに咀嚼することは容易ではありませんでした。その際に、「自国の言語」が使えたことは、今振り返ると、大変な幸運だったのだと思います。

もちろん、学問はたとえ日本語で展開されるとしても、ただ土着的で伝統的で閉鎖的なものではなく、世界との相互作用の中で鍛えられ、生みだされていくものです。そうした交流を体現するのが、現在の教養学部の前身である第一高等学校の校長を務めた新渡戸稲造です。カナダのブリティッシュコロンビア大学には新渡戸の名を冠した美しい日本庭園があります。その石碑には、「願わくはわれ太平洋の橋とならん」という有名な言葉が彫られています。私も両大学の交流事業で訪問し、日系カナダ人のサンタ=オノ学長とともに野球部の交流試合を観戦しました。その際、この庭園を案内してもらい、この言葉が東京大学への入学の面接で述べられた、新渡戸21歳の時の決意だと知りました。

新渡戸の名は、*Bushido: The Soul of Japan* という英文の書物とともに世界に知られています。これが書かれたきっかけは、ベルギーのある法律家との問答でした。日本の学校では、西洋のキリスト教のような宗教教育が行われない、という話を聴いたその法律家が、それでは道徳的・倫理的教育がどのように行われるのか、と訊ねました。それに対する新渡戸の答えは、「武士道」と理解されているものを通じて日本人は正不正（Right and Wrong）の観念を身につける、という説明でした。新渡戸の武士道は、西洋の思想・学問の枠組みに触れた日本の知性が、日本の「伝統」を西洋的な言語で再構成することで、新たに構築したものと言えるのです。この書物を一読すると、「太平洋の架け橋」たろうとする新渡戸が古今の西洋の事例を引照しながら、日本の人びとの倫理意識を整理し、新たな説明方法で探究した書物であることがよくわかります。説明の文脈においてプラトン、アリストテレス、ゲーテ、モムゼン、フィヒテ、バークレー、といった西洋の思想家・著述家の議論を縦横に組み替えて、新たな展望のもとに置く、という作業を行っているのです。この思想の橋渡しがあったからこそ、西洋人自身がそこから啓発を受けたのでしょう。この本を贈られたアメリカのセオドア=ルーズベルト大統領が深い感銘を受けたのは、まさに日露戦争中のことであり、講和の仲立ちの重要な契機ともなっています。

新渡戸稲造は第一次世界大戦後、日本も常任理事国として参画した国際連盟の事務次長に就任しますが、それもこの英文著作がもたらした国際的な名声が一因でした。新渡戸は1922年には、アインシュタインやキュリー夫人といったノーベル賞受賞者を主な委員として、知的活動の国際的保護と発展に取り組む知的協力国際委員会を創設します。これは現在のユネスコの前身にあたる機関でした。

このように当時の世界最先端の知識と、日本という地域社会独自の伝統や過去の理解との往復運動は、新渡戸が主導した「郷土会」の活動にも見られます。新渡戸は『農業本論』で、日本の農村について一郷一村の詳細な研究を行う「地方（ぢかた）学」を提唱しています。その文献目録には百数十編に及ぶ様々な言語で書かれた西洋の文献が引用されています。後に農政官僚として活躍し、日本民俗学という新しい学問を主唱する柳田國男も本書に影響を受け、新渡戸の私邸で開催された「郷土会」に参加します。その柳田はやがて新渡戸の依頼を受けて国際連盟常設委任統治委員会の委員に就任し、そこで大国による委任統治施策の下で犠牲となる住民の情況を見る中で、「常民（common people）」という概念等を鍛えていくのです。

こうした国際社会の発展に向けた活動の中で、地域の多様な住民の福祉とその固有の文化を発展させることが主題化され、日本独自

の伝統・過去についての考察との往復運動が深められ、「ネイティブ人類学」という独自性をもつ柳田の学問が生みだされていくのです。このプロセスは、まさに新渡戸が願った「橋」づくりでもあったのです。

しかし、太平洋をつなぐ橋たらんとした新渡戸の努力にも拘わらず、日本はアメリカ合衆国との戦争に突入し、敗戦を通じて大きな試練に直面します。そのときに、敗戦に至る自国の歴史と伝統を省察しつつ、同時に世界的・普遍的な価値を生みだしうる、そのような日本文化を築こうと尽くしたリーダーがいます。旧制高校生の時期に新渡戸の教えに強く感化された南原繁です。南原は、終戦直後の時期に東京帝国大学総長を務めますが1946年「新日本文化の創造」と題する講演で「個性を失った民族は滅亡」するとして日本の神話や伝統の意義に触れています。戦前・戦中に顕著だったような神話の「民族宗教的」な理解を超克し、その独自の伝統を世界的で普遍的な文化の基礎ととらえ直すことが可能であり、今こそ「国民は国民たると同時に世界市民として自らを形成し得る」と論じました。南原は、終戦直後に東京大学のキャンパスがGHQに接収されそうになったときに断固として抵抗しました。また第一高等学校を単なる前期の教養課程としてではなく、教養学部という固有性をもつ独立した一部局として東京大学に位置づけることにも尽力しました。南原は、平和文化国家として日本を再興するための戦後の大学改革の眼目として、大学教育が全ての人に開かれたものであるために各地に大学を設置したこと、そして、旧制時代に専門に偏り過ぎていたのを改め一般教養を取り入れたことの２つを挙げています。これは現在の東京大学の礎となっています。

こうした南原の理想を実現する場としての新制大学、駒場の教養学部を組み込んだ東京大学の建設において活躍したのが、南原の後を継いで総長に就任した矢内原忠雄です。矢内原が、第一高等学校の学生時代に校長だった新渡戸に強い影響を受けたことはよく知られていますが、*Bushido*の日本語訳を出版した人物でもあるのはおもしろいと思います。新渡戸の後継者として経済学部で教鞭をとりますが、日本が戦争に進む中、軍部に対する厳しい批判をしたことから1937年には大学からの辞職を余儀なくされます。戦後になって南原総長のもとで復帰し、かつての新渡戸校長のように、「人間教育」を通じて、忠君愛国の国家主義者ではなく、世界的な公共心をもつ、新たな時代の学生たちを育てようとしたのです。総長退任後には学生たちが抱えている悩みなど心の問題に対処するために、新設の東京大学教育学部を巻き込んで学生問題研究所をつくるといった活動もされました。

最初に言いましたように、非西洋文化に根差す学問の伝統を保持しながら、同時に、長く西洋が主導してきた世界的な学問の議論の最先端に参画できているのは、世界的にも稀有なことです。こうした東京大学の独自の資産を基礎に、人類共通の課題に取り組む貢献を積極的に進めるために昨年8月に設立されたのが、東京大学のグローバルコモンズ・センターです。

今私たちが暮らす地球は完新世に続く地質時代、「人新世」、に入っていると言われます。産業革命以降拡大してきた人間の活動が地球環境に大きな負荷をかけ、近年それが急速に進行しています。そして人類共通の財産である地球環境が危機にさらされているのです。そうした認識から、この共通財産としてのコモンズの責任ある管理のための体制を作る、という人類全体にとって重要な課題に取り組む学術拠点として、このセンターは設立されました。「コモンズ」という言葉には、常に「悲劇」という観念がついて回ります。「人類共通の財産である」ことは同時に、「自分の財産として所有する者がいない」ことを意味します。誰も自分のものとして大切にせず、結果として自分勝手にやりたい放題、ついには共有の場自体が荒れ果ててしまうか失われてしまう、というのがこの「コモンズの悲劇」の筋書きです。地球温暖化は着実に進行しており、コモンズは悲劇に向かって加速していることは確かなのです。

グローバルなコモンズとして守られるべきは自然環境に限られません。人間が作った都市や建物にも及び、文化芸術さらにはサイバー空間も含みます。こうした多様なコモンズの枯渇や荒廃の「悲劇」を回避するために、新しい科学や技術が不可欠です。しかし、望ましい方向性はどちらなのか、制度はどうあるべきか、現実的な調整は可能なのかなど、どれも高度に知的な問題なのです。いまだ誰も絶対の正解には到達していないこの問題の解決を、人文学的理解、社会科学的知見、自然科学的な知識、実装するための高度なエンジニアリングを駆使して、世界の最高峰の知性とともに追究する、その中で東京大学にしかできない独自の貢献をするという野心的な挑戦です。こんなに重要で、尚且つ刺戟的な、知的活動は滅多にないのではないでしょうか。

私は、総長に就任した際に、高度に知的で公共的な問題に大学が経営体として取り組み、大学を起点とする社会変革を駆動するために実際に行動するという目標を東京大学ビジョン2020として掲げました。その可能性を確かめ、追究するための大きな取り組みとして昨年発行した東京大学FSI債があります。FSIはFuture Society Initiativeの頭文字で、未来社会協創を指す言葉ですが、この大学債は現在の資金不足を解消するための資金調達ではなく、まさしく未来の、まずは40年後の大学を見据えて、大学と社会に変革をもたらすために積極的に今なすべき戦略的な投資を行うための資金として位置づけています。

学問研究の時間スケールは多様です。かつて東京帝国大学農科大学で教え、公園の父とも呼ばれる本多静六は、1915年に明治神宮の森の造成を手掛けます。当時の大隈重信首相は、日光東照宮や伊勢神宮のように明治神宮もおごそかな杉林にするよう要請しました。しかし、本多は首相に対し、保水力に乏しい都市近郊の土壌の性質を踏まえた科学的考察をもとに、150年先の植生まで見通し、杉ではなく、段階的にカシ、シイ、クスなどの常緑広葉樹を中心とする天然林を目指すべきだと主張し説得しました。その結果作られたのが、樹木の多様性と持続可能性を有する現在の豊かな神宮の森なのです。

樹木のように150年先ではありませんが、

40年という期間は、研究者の卵が大学において研究を始め、それを定年まで続けるライフサイクルとほぼ一致します。現役世代が責任を持って行動し、それを次の世代に伝え、債券の償還時において大学が社会的にさらに高く評価されているプロセスを創るのに十分な期間でしょう。大学債で得た資金は本学における研究の多様性を維持し、卓越性を高めるため、いわば未来における学問の豊かな森を作り上げるために、投資したいと考えています。幸いにしてこのFSI債は、発行予定額200億円に対し6倍を超す1260億円の注文を集め、大きな社会的注目を浴びました。東京大学への社会の大きな期待・信頼を反映したものと言ってよいと思いますが、このような期待・信頼を世界的に支えるものは今日その一端をお話ししたような、東京大学という場において培われ積み重ねられてきた実績であり、価値創造への献身なのです。

私の総長としての6年間の活動の理念を、簡潔にあらわすために「究知協創」という四字熟語をつくりました。事物の理を究めて知恵を深め、その共有を基盤に多様な人びとと力をあわせ、共感のもとでより良い社会を創っていくという意味です。皆さんにも加わっていただきたいと思います。卒業生として大学から遠ざかるのではなく、新たなコモンズとなる東京大学の一員として今後人類共通の課題に対して積極的に発信する「知のプロフェッショナル」の仲間として、皆さんとともに歩んでいきたい、というのが私の願いであり、東京大学の未来への確かな道筋を示すものだと確信しています。

本日は卒業おめでとうございます。

五神総長が色紙に直筆でしたためた四字熟語

答辞

理学部
吉田智治さん

日を追うごとに暖かさを増していき、春の芽吹きを感じる季節となりました。本日、私たち卒業生のためにこのような式典を催していただき、誠にありがとうございます。また、ただいま五神総長から告示のお言葉を賜りましたことに、深く感謝申し上げます。

私は理学の道を極めることを夢見て、推薦入試で東京大学に入学しました。前期教養課程では幅広い教養を身に付けさせていただくとともに、推薦生として理学部物理学科の先生方にご支援いただき、興味の赴くままに物理の様々な分野を学びました。後期課程では理論物理、実験物理の基礎を学ばせていただくとともに、演習の授業やゼミナールの中で、物理の問題について先生方や学科同期の皆様と議論させていただきました。時に議論は白熱し、気がつくと外がすっかり暗くなってしまっていることもありましたが、この経験は非常に刺激的で、多くのことを学ぶことができました。

また、私は学部三年の時に、東京大学理学部の留学プログラムであるSVAPのプログラム生として、ウィーン大学の研究室を訪問させていただきました。そこでは、量子情報理論の中の高階量子演算と呼ばれる分野の研究を行いました。この訪問を通して、様々なバックグラウンドを持つ人たちと交流させていただき、多様な考えを知ることができました。このことから、物事をより客観的な立場から捉えることができるようになったと思います。また、私にとって海外で研究活動を行うというのは非常にハードルが高く、途中で挫けそうになることもありましたが、それでも実現することができたのは、先生方や職員の方々からのご支援や友人たちの存在が大きかったと思います。特に、友人たちが学業や課外活動などにおいて、それぞれ自分の決めた道に従って努力する姿を見ることで、私も新しいことに挑戦する勇気をいただきました。

私たちは今日卒業の日を迎え、それぞれが自らの決めた方向に進んでいきます。その行先には、解決すべき問題が山積みになっていることと思います。私たちには、東京大学で学んだそれぞれの専門分野を生かし、協働しながらこれらの問題に対処していくことで、世の中をより良くしていく使命があります。そのために、今後も様々なことを学び、より一層の努力をしていくことを誓います。

最後になりましたが、本日に至るまでご指導、ご支援して下さった先生方、職員の方々、ともに学び、切磋琢磨しあった友人たち、そして、一番身近な存在として私たちを支えてくださった家族に、心より感謝申し上げます。東京大学がこれからも素晴らしい発展を遂げていくことを祈念して、答辞とさせていただきます。

答辞

経済学部
佐藤大樹さん

本日は、新型コロナウイルス感染拡大に伴う非常事態の中、私たち卒業生のためにこのように心温まる式典を催していただき、誠にありがとうございます。ご多忙の中、諸先生方ならびにご来賓の方々のご臨席を賜りましたことに、深く御礼申し上げます。また、ただいま五神総長より告辞のお言葉を賜りましたことに、重ねて感謝申し上げます。

振り返ると、一生ものの学びと出会いが得られた4年間の学生生活でした。前期教養課程では学問の世界の奥深さに触れることができました。後期課程では経済学部に進学し、複雑な社会現象に対する問題設定の仕方から論理的分析の方法、第三者への伝え方まで、知的営みの手続きをご指導賜りました。また、互いに刺激しあえるかけがえのない学部同期、友人たちにも恵まれました。しかし、ご存知の通り、私たちの大学生活のあり方はこの一年で大きく変容しました。不確実性の高い状況下で、手探りながらも迅速に学びの場を設けてくださった大学の方々への感謝は尽きませんが、同期と顔を合わせて議論する機会が少なくなったことは残念でなりません。各々の体験こそ異なれど、皆さんもこの一年を振り返ると、やり残したことがある、消化不良だという思いがあるというのも偽らざる感情ではないでしょうか。

しかし、大学卒業は終わりでも始まりでもありません。卒業後も成長していく機会は尽きることはなく、大学生活で培ってきたことを土台とした連続的なものであると思われます。だからこそ、学んできたことの意義を噛みしめつつ歩みを止めないことを決意いたします。

卒業以降も学び続けるという個人的な決意とは別に、私たち卒業生はこの恵まれた環境で学んできたことを社会に還元する責任を負っています。現在、社会には未解決の課題が山積しています。感染症の拡大という未曾有の危機のみならず、パンデミック以前から顕在化していた経済・社会問題にも取り組まなければなりません。その過程で知識自体は時代遅れとなるかもしれません。しかし、私たちは「まだ答えがない問い」への取り組み方を学んできました。卒業生一同、産学官あるいは分野の垣根を超えて、社会全体の幸福の実現に向けて尽力して参ります。

最後になりましたが、本日までご指導頂いた諸先生方、大学生活を支えてくださった職員の皆様、ともに学生生活を過ごした友人たち、そしてなにより、私たちの成長を温かく見守り支え続けてくれた家族に、改めて心より感謝申し上げます。また、皆様のご健康と東京大学の益々の発展を祈念して、答辞とさせて頂きます。

令和2年度学位記授与式

令和2年度学位記授与式が、3月19日（金）に、安田講堂において挙行されました。今年度の学位記授与式は、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて規模を縮小し、各研究科から選出された約80名の参加によりおこなわれました。アカデミック・ガウンを着用した五神総長はじめ理事・副学長、理事、研究科長、研究所長並びに来賓の宗岡正二 東京大学校友会会長の列席のもと、10時に開式となりました。五神総長から各研究科の修了者代表に学位記が授与され、修了者に向けて告辞が述べられた後、宗岡校友会会長から祝辞をいただきました。その後、2名の修了生総代（総合文化研究科博士課程 大竹裕里恵（おおたけ ゆりえ）さん、数理科学研究科博士課程 甘中一輝（かんなかかずき）さん）が順に答辞を述べ、式を終えました。式典の様子はインターネットを通じてライブ配信され、修了者とそのご家族を含む、多くの方にご覧いただきました。

総長告辞

本日ここに東京大学より博士、修士、専門職の学位記を授与される皆さん、誠におめでとうございます。

このたび、修士課程3,156名、博士課程1,046名、専門職学位課程321名、合計で4,523名の皆さんが学位を取得されました。そのうち留学生は1,129名です。

皆さんは、私が総長として送り出す最後の卒業生となります。皆さんの学業の最終年に起こった新型コロナウイルスの感染拡大は、私たちの社会のあり方や日常を大きく変えました。この一年は、東京大学の144年の歴史のなかでもとりわけ困難で、かつ大きな転換に挑んだ年として、人びとの記憶と記録に刻まれ、永く語られることになることでしょう。

そうした不自由と困難のなかでも諦めず、日々研鑽に励み、本日ここに修了の日を迎えられた皆さんに、東京大学の教職員を代表して、敬意を示すとともに、心よりお祝いを申し上げます。また、皆さんの学業を物心ともに支え、この晴れの日を共に迎えられたご家族のみなさまにも、お祝いと感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。

私たちは今、デジタル革新と呼ばれる、大きな変革の時代を生きています。さまざまな技術革新とインターネットの繋がりが創り出したサイバー空間の急拡大は、個人の生活から、国家や世界のあり方全体を激変させています。そのさなかに私たちは新型コロナウイルス感染症の世界的拡大に遭遇したのです。この1年間の感染症対応において、さまざまな場面でデジタル革新に助けられたと感じています。

リアルタイムでのオンライン会議は、大学の活動を中断しないための命綱となりました。とりわけ私が驚いたのは、mRNAワクチンが驚異的なスピードで開発されたことです。これまでの不活化ワクチンや生ワクチンの開発製造からすると信じられない早さです。今回の感染症対策を支えたのは最新のデータサイエンスやAI技術でした。また、ワクチン開発においてはデジタル化されたゲノム情報が世界に公開され、連携協力が一気に進んだことも重要です。

大学内でもデジタル革新は急加速しています。昨年4月から教職員と学生が一丸となって全講義をオンライン化し、学事をほぼスケジュール通り進めることができました。オンライン講義に関する情報ポータル「utelecon（ユーテレコン）」は本学だけでなく、他の大学の教員にも参照されています。また、本学が開発した接触確認アプリ「MOCHA（モカ）」は、すでに学内の講義室や食堂の混雑状況の確認に利用されています。オンライン講義のメリットも数多く見つかりました。通学の距離や時間を気にせず講義に出席でき、駒場や柏地区の学生が授業の合間に本郷の講義を聴講したりすることが可能となり、歓迎する声も多く聞かれました。

私は一年前、感染急拡大で急遽オンライン中継となった学位記授与式で「バーチャルに拡張された安田講堂において、祝いたい」と述べました。学部学生有志によるバーチャルな卒業式も工夫され、それをきっかけに「バーチャル東大」というVR空間が生まれました。昨年9月の「高校生のためのオープンキャンパス」では、これを活用させてもらい、私自身もアバターとして登場しました。延べ1万4千名もの高校生が全国から訪問し、大盛況でした。参加した高校生たちからは「実際にその場にいるような気がした」とか「みなと一緒に参加している感じで楽しかった」といった声が寄せられています。

しかしながら、ここで発見されたのは、単なる技術の便利さやVR空間アプリの楽しさではありません。それは物理空間とサイバー空間との高度な統合であり、もっと大きな可能性につながっています。デジタル革新は、印鑑をそのまま電子印に替えるような、既存の仕組みをそのままデジタル化することではありません。そもそもなぜ印鑑が必要だったかという原点にまで立ち返り、最新のサイバー技術を存分に活かし、新たな社会制度の構想と統合とに取り組むべきなのです。そうした高度な統合が生みだす新しい可能性とはなにか。ヒントは、私たち自身のからだにあります。脳は情報システムを司っていますが、身体はその情報と物理空間とをつなぐ役割を果たしています。情報で作られたサイバー空間と身体が属する物理空間は、別々の存在ではありません。すなわち、物理空間とサイバー空間を対立させ分離してしまうのでなく、私たちの身体が実現しているようになめらかに統合させるべきなのです。この「身体性」は、デジタル革新を考えるうえで、とても重要なキーワードなのです。

私がコロナ対策の経験から学んだ、もう一つの主題も、この身体性に深く関わっています。それは、これまでごく普通の当たり前と思っていた、空気を共有した対面コミュニケーションの価値の再発見です。研究活動や教育、大学運営を円滑に進めるには、相互の信頼関係や共感が不可欠です。現在のリモート環境だけでそれを醸成するのは難しいということを何度も痛感しました。サイバー空間における身体性の問題です。私は、人間がコミュニケーションに用いる言語のルーツは互いの毛繕いだったということを昨年度の卒業式で紹介しました。未来の情報メディアに、手触りや温もりといった身体感覚をどのように取り込んでいくか、それは学問的にも大変魅力的な挑戦課題なのです。

一方で、身体は意識されにくい対象です。今皆さんは、どの筋肉がどのように作用して、動きのバランスをとっているかなど全く意識していないでしょう。日常生活では、身体は黙って仕事をしているのです。この寡黙さは、ケガをした時のリハビリテーションやスポーツのコーチングの難しさでもあります。

しかしながら、身体を通して獲得する知識・経験はかけがえのない財産です。私自身もかつては、対面での演習や講義とオンラインの状況で得られる情報はさほど変わらないように考えていました。しかし、実は身体知ともいうべき作用が存在しているのです。対面の機会がコロナ禍で大きく制限された結果、我々は当たり前に思っていた大学という物理的な空間のかけがえのなさを再認識したのです。現状のオンラインツールでは醸成できない身体知の価値は、今後ますます大きくなるでしょう。その一方で、教室での講義や実験や実習、フィールドワークなど、対面での活動の質を高めていくことも大切です。

先ほど、身体と脳の関係について、物理空間とサイバー空間の融合に他ならないという話をしました。イギリスの哲学者アンディ・クラークは、「言語が登場して以来、我々はある意味サイボーグだった」と述べています。リアルな身体とバーチャルな言語は複雑に絡み合っているのです。人間は言語の発達において、情報と身体とが融合する空間を多次元に生みだし、個人の肉体の限界を超え、社会という協創の仕組みを発達させてきました。つまり人間は声を出すことで、身体を他者と共鳴させ共感を育み、そして文字というメディアを使いこなすことによって、時間・空間をこえた知識の共有を拡張してきたのです。皆さんが学んだ大学での多様な学問も、その長年にわたる蓄積の成果なのです。

皆さんはスマホでの日常のやりとりで、「emoji」を使いこなしているのではないでしょうか。私自身はあまり使いませんが、このemojiが切り開く新たな可能性には注目しています。微妙なニュアンスを伝えるのにも便利なこの新しい文字は、1999年に日本で開発され、世界各国でも用いられ、2016年にはニューヨーク近代美術館に永久収蔵されています。その総数は3000字以上と言われ、常用漢字を超えています。言語学や情報学の真面目な研究対象にもなっています。今日修士課程を修了される、学際情報学府と新領域創成科学研究科の大学院生４名のチームが開発した、emoji入力のためのキーボードと入力支援システム「emolingual（エモリンガル）」は大変注目を集めています。

先ほどコロナ禍で、私自身がサイバー空間における身体性の大切さに気づいたことに触れましたが、emojiはある意味で身体的表現の復権でもあると思うのです。歴史的にみると、手紙などの手書き文字が廃れ、標準化された活字や印字が中心となり、文字の書きぶりに気持ちを込める機会が失われていきます。他方において、サイバー空間では生の感情がぶつかり合う炎上や、姿も顔も見せないままでのヘイトスピーチや排除の暴力が目立っています。そのようななかでemojiはいわば感情を表現する「表感文字」であり、現代の情報技術を使いこなして、情動と身体性を備えた新しい文字を生みだす工夫なのです。それは、言語本来の触れあいの共感を復活させるものとなるのかもしれません。

今、私たちの生活では、サイバー空間の重要性が増しています。そのサイバー空間はフェイクニュースの蔓延や、エコーチェンバー効果による分断の深刻化など、荒廃が指摘されています。一方の物理空間の方も地球温暖化は止まらず、危険な水域に入っています。産業革命以降、人類の活動規模が拡大し続け、地球環境そのものを左右する力まで持つようになりました。新たな地質時代「人新世」という言葉の登場は、その危機感を象徴するものです。日本でも昨年10月に2050年までにカーボンニュートラルを目指すという目標を

掲げました。昨年12月に東京大学が主催した、東京フォーラム2020で最新の科学データも踏まえて議論を行いました。そこでは、2030年までに二酸化炭素排出量をほぼ半減出来なければ、人類は自らの意思と行動によって地球システムを制御する機会を失うかもしれないとの議論になりました。残された時間はあまりありません。とはいえ、今私たちの手元にある知恵だけでは対処できないことは明らかです。そのために必要な知恵をどうやって繰り出すのか、それが問われています。

そうしたなかで、大学はいま何をなすべきなのでしょうか。私は、新しい知恵をどうやって無から生み出すのかが問われているのだ、と思っています。

このことを考える時、私はいつも量子力学の真空場の「ゼロ点振動」を思い浮かべます。このゼロは何もない、空っぽという意味ではありません。その揺らぎは、原子に捕まっている励起電子が光を放つ自然放出を誘起し、粒子と反粒子の生成消滅を引き起こすものです。電磁波のエネルギー測定では、基準との差だけが問題なので、通常はこのゼロ点振動は気にしなくてもいい、講義でもそう説明しています。しかし、重力の効果も含めるとエネルギーの絶対値が問題になるので、無視できなくなります。たとえば２枚の金属板を接近させると電磁場のゼロ点振動のエネルギーが隙間の距離に依存することになり、金属の間にカシミール力とよばれる力が生まれます。この効果はとても小さいので、その検出には注意深く精密な実験が必要となります。私の長年の友人であるカリフォルニア大学リバーサイド校のモヒディーン（U.Mohedeen）教授はこれをライフワークとしています。彼は10年がかりで微小な金属球と金属板の間に働く力を原子間力顕微鏡の原理を用いて精密に測定し、ゼロ点振動のエネルギーを捉えることに成功しています。

皆さんも、研究が言葉として結晶化し論文にまとまる前の段階でゆれ動き、さまざまな悩みと向かいあってきたのではないでしょうか。じっくりと考え、言葉を探っている姿は、ゼロ点振動のように、傍からは何もない状態に見えます。しかし、それは新しい知を生み出すために不可欠のプロセスなのです。大学院での研究生活を通して皆さんは、そうしたゼロ点振動の力を経験されたのではないでしょうか。

プリンストン高等研究所の初代所長のエイブラハム・フレクスナーは「科学の歴史を通して、後に人類にとって有益だと判明する真に重大な発見のほとんどは、有用性を追う人々ではなく、単に自らの好奇心を満たそうとした人々によってなされた」と述べ、教育機関は好奇心の育成に努めるべきだと主張しています。皆さんも本学での生活のなかで、何かに熱狂的に取り組んでいる友人や海外の研究者に驚き、いつの間にか興味を持つようになった経験があるかもしれません。好奇心を育むことは多様なゼロを豊かにすることなのです。

残念ながら、社会には見える「1」になった成果しか評価しない人びともいます。高度経済成長期に1を10にすること、すでに実現した10を100に増やすことが歓迎されたのは、成長の道筋がはっきりしていたからです。

しかし、現代は予測困難な課題が次々と生まれる変化の時代です。課題が浮かびあがってきてから、これまで通りの対応をしても慌てるだけです。研究者の好奇心のエネルギーを秘めた「多様なゼロ」をたくさんそろえておくことが、なにより重要なのです。つまり勝負どころは「ゼロから1」をさまざまな領域で創出する豊かな苗床と機動力なのです。

振り返れば東京大学創設当時の明治初期も、第二次世界大戦からの復興期も、激動の時代でした。先達は新たな社会を創るために、新たな学知の場として東京大学をゼロから立ち上げ、試行錯誤を続けてきました。その、いわばゼロの力こそが、激動の時代の最中にある今、大学の持つ本来的で最も大切な価値だといえるでしょう。

東京大学にはそのゼロの力が豊富に備わっているということを、私が総長としてさまざまな人びとと出会うなかで何度も実感しました。それは「いつか1に変わりうるゼロ」であり、新しい知の源泉です。しかし無造作にぼうっとしていると見逃してしまうかもしれません。見逃さないためには、自分の考えや興味関心とは異なることでもその場で切り捨てず、対話を続ける、その大切さも学びました。あることに人生をかけ熱心にやっている方は、そこに必ず面白さを感じています。それこそがゼロの力であり、それを主体的に育むことが大切なのです。そのためには、いつか1に変わりうるゼロの兆しを見極め、ワクワクしながら飛びつく好奇心と、そのゼロの力をまわりでも支え続けるコミュニティの共感力が必要です。他者が感じている面白さを、対話を通して自分事としてとらえること、つまり好奇心と共感性が大学における創造の基盤なのです。卒業していく皆さんもまた、この東京大学での経験を忘れないでいてほしいと思います。

まだ見ぬ未来を皆さんがより良くするためには、さまざまなチャレンジが必要です。大学はその実験的な試みを、ここに集う学生や研究者と共有する、いわば劇場空間でもあります。この学芸の劇場には多様な演目があり、個性的な演者が登場し、社会からさまざまな背景を持つ観客が出入りします。皆さんも、異なる価値観に驚き、圧倒され、時には居心地の悪い思いをしたことがあったかもしれません。しかしながら、世の中をより良い社会とするための道筋は、決して楽に歩めるものではありません。コロナ禍で加速したデジタル革新は、一歩道を誤ると一部の企業や国家がデータを独占し、データを持つ者と持たざる者に決定的な断絶や格差が生まれる「デジタル独占社会」に転落してしまいます。他人事を自分事として捉えることは簡単ではないからです。私自身総長を務めるなかで、ときに恥ずかしい思いをし、ヒヤッとしながら多くのことを学んできました。多様性を真に尊重するということは、言葉で言うほどたやすいことではなく、自らしっかり意識し常に努力して行動しなくては、育たないものだと痛感しました。しかし、自分と離れた立場からも見ることができ、多様な人びとと対話することができる場を持つことは、かけがえのない財産となるものだと確信しています。

この告辞は私が総長として伝える最後のメッセージとなります。最後に少し、この式典の舞台裏の話をしましょう。私のこれまでの

式辞や告辞は、じつは本学の多様な学問分野の、数多くの教員との対話と熟議を通して練り上げられたものなのです。私は総長として東京大学が長年蓄積してきた豊かな学問に直接触れる機会に恵まれました。それらはどれも、とても新鮮な出会いでした。その知の魅力とそれが持つ力を、入学や卒業の機会にみなさんに伝えたいと思い至ったのです。さまざまに専門を極めてきた知のプロフェッショナル同士の議論によって、発想のシナジーを生み出す時間は、いつも心から楽しく、私が掲げてきた協創の神髄を自ら体感するものでした。物理学の本ばかりが並んでいた私の書斎の本棚も、言語学、歴史、経済学、社会学、生命科学、情報学など多様で豊かな姿になりました。お付き合い頂いた、延べ100人以上の先生方には、この場を借りて感謝と御礼を申し上げます。東京大学総長の6年間は、私のこれまでの人生のなかで最も贅沢な時間だったと噛みしめています。

本日東京大学を卒業する皆さんは、もはや見ているだけの観客でも、台本をなぞるだけの演者でもありません。皆さん自身の人生の脚本家となり、自分の活動領域を超えた高さから俯瞰する力、他人事を自分事としてとらえる力、そして現在だけでなく、過去から未来への流れをとらえる力を大切にし、社会のなかでより良い未来に向けた変革を、先導してほしいと強く願っています。そして好奇心を充電し、さらに磨いてみたくなった時には、いつでも東京大学を訪れてください。

多様なゼロからの発見に満ちた喜びの場として、東京大学が一層発展することを願いつつ、また新たな世界を良きものとする知のプロフェッショナルとして、共に社会を駆動していくという決意を携えて、私も皆さんと共に、卒業したいと思います。

本日は誠におめでとうございます。

来賓祝辞

東京大学校友会会長
宗岡正二さん

只今、ご紹介頂きました宗岡でございます。東京大学校友会を代表致しまして、本日学位記を授与される皆様方に、心からお祝いを申し上げたいと存じます。また、ご家族の皆様方にも、重ねてお祝いを申し上げます。本日は誠におめでとうございます。

まずもって、足下のコロナ禍の最中にかかわらず、このような形で学位記授与式を執り行うことができましたことは、総長はじめ学内の関係者の皆様方のご尽力によるものと心からの感謝を申し上げたいと存じます。また、本日の晴れがましい学位記授与式に心ならずも参列が叶いませんでした多くの方々の無念さにも、私たちは思いを寄せなければなりません。

さて、東京大学校友会は、2004年に発足した全学同窓組織であります。校友会の会員には、個人会員と団体会員とがあり、個人会員は、存命の卒業生・修了生20万人、及び、すべての在学生、教職員であります。実は皆さんもすでに、東京大学への入学ないし東京大学大学院への進学の時点で、校友会の会員になっておられます。加えて、団体会員として、部局の同窓会、国内外の地域同窓会等々、311もの団体が登録されております。

校友会は、在学生のための活動のみならず、卒業生・修了生向けの行事も企画・運営しております。卒業生・修了生のための最大の行事は、毎年秋のホームカミングデイであり、延べ7千名の方々がキャンパスに集います。この機会をとらえて、定期的に同窓の仲間や大学との繋がりを改めて感じて頂きたいと思います。また、当日は、同窓生の再会のイベントも開催致しますので、是非皆さんに、来る2031年のホームカミングデイには、修了10周年のイベントを企画して頂きたいと存じます。

さて、皆さんは、これから、それぞれ新たな道を歩まれる訳ですが、今後の長い人生においては、想定外の環境変化に加え、仕事や研究における様々な課題に直面し、思い悩むことが必ずあろうかと思います。

そうした人生の様々な局面において、東大校友会のグローバルなコミュニティは、本日学位記を授与される皆さんに、有益な助言やアイデアを提供できるはずであります。国内の各都道府県、及び、海外の35カ国・地域には、現地在住の卒業生・修了生による地域同窓会があり、会員同士の親睦や情報交換を行っております。今後、皆さんが、地方や海外に勤務、在住される折には、是非、現地の地域同窓会にご連絡頂きたいと思います。

かつて、国際化以前の時代には、先輩たちから、「弱い生き物は必ず群れる。東大生は卒業しても決して群れてはいけない。独立独歩せよ」と教えられてきたものでした。しかし、今や、あらゆることがグローバル化している世界にあって、東京大学の卒業生・修了生は堂々と、むしろ、「スマートに群れる」ことが求められているのではないでしょうか。

特に、現在の私たちには、新型コロナのようなパンデミックとの闘い、気候変動・地球温暖化との闘い、民主主義を脅かす問題や人権侵害との闘い、あるいは経済格差拡大との闘い等々、個々人の力だけでは決して解決しえない、国境を越えた、かつ人類共通の課題と闘っていかねばならない状況にあります。まさにグローバルに国境を越えた、知性と良識からなるネットワークの重要性が一層増しているものと思います。

こうした中で、皆さんには、東大校友会の持つ全世界的なネットワークを大いに活用頂き、グローバルな課題解決に、力を尽くして頂くことを期待したいと思います。また、その過程で、皆さんが得た知識をも、是非東京大学にも還元して頂ければと思います。

一方、こうした活動を真に意味あるものにしていくためには、卒業生・修了生20万人の状況をしっかり認識し、皆さんと大学、及び、皆さん相互のネットワークを確立することが重要であります。皆さんには、大学と校友会のオンライン・ コミュニティであるTFT（ティーエフティー）で、ご自身の情報を逐次更新頂き、校友会、すなわち自分たちのネットワークの強化に努めて頂きたいと存じます。

最後に、重ねて皆さんの人生の門出をお祝い申し上げますと共に、今後益々のご活躍を祈念致します。改めまして、本日は誠におめでとうございます。

式典写真：尾関祐治

答辞

総合文化研究科博士課程
大竹裕里恵さん

依然として、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止に予断を許さぬ状況が続く中、対策を講じた形で式典を開催頂きましたこと、また、五神総長よりお言葉を賜りましたこと、修了生を代表し心よりお礼申し上げます。

この、100年来の世界的な感染症禍は、科学者、及び科学を学んだ者が、科学情報の発信者として、そして、科学情報の受け手としてどのようにあるべきかを考える機会ともなったように思います。コロナウイルスやワクチンの科学的な理解、個々人の適切な感染予防のため、数理モデルによる感染動態の分析やウイルスの感染機構についての発信が、科学者からも数多く行われました。こうした情報は、必ずしも科学者が想定した通りに人々に伝わり、想像した通りの行動につながらなかったことも多くあったのではないかと思います。近年、科学コミュニケーションにおいて示唆されるように、受け取った科学的情報に基づき、感染リスクなどの判断や行動を最終的に決めるのは情報の受け手であり、個々の科学リテラシーに依存します。日常生活からコロナ禍のような世界が直面する困難まで、科学が日常のほぼあらゆるものに関与している昨今において、科学者を含め、全ての人が科学を自分事としてとらえ、科学リテラシーをすり合わせていくことの重要性が示されています。科学者の立場において、人々が必要とする情報をいかに把握し伝えていくか、適切な行動のために知ってもらいたい情報をいかに透明に伝えるか、そして、科学情報の適切な理解のために、常時からどのような対話や発信を試みるべきかを意識的に考えていく必要性を感じました。同様に、私たちは科学研究に携わった経験から、統計解析や数理モデル解析、各論説の根拠となっている科学論文の読解にある程度の心得があり、発信される科学的情報を咀嚼し、科学的に正しいことの精査や理解ができる基盤が比較的備わっているといえるでしょう。培ったこれらの経験を活かし、発信される科学的な情報を率先して自分事として受け取り、適切な行動を判断して実行していくという意識を持つことも、科学を学んだ私たちが社会において果たすべき義務ではないかと考えています。

この感染症禍において、私たちは研究活動や学術活動の変化を余儀なくされました。その中で、東京大学の対応には感銘を受けました。新型コロナウイルス対策タスクフォースのいち早い立ち上げ、活動指針や感染者対応指針のいち早い検討と明文化、及び順応的なステージ管理、医学・疫学知見のレビューに基づいた、新型コロナウイルスの感染様式とこれを踏まえた感染防止策を周知するeラーニングの配信、情報科学分野の技術に基づく学内の人口密度モニタリングとこのリアルタイムでの公開など、枚挙にいとまがありません。この結果、東京大学では今日にいたるまで感染クラスターの発生がありませんでした。これは、各研究・学問分野のスペシャリストがいること、そして、科学的根拠を理解しこれに基づいた行動を実行できる構成員がいるからこその対応であったのではないかと思います。この事例は、適切な科学コミュニケーションに基づいたリスク管理のモデルケースの一つと言えるのではないかと感じました。

本日学位を取得した私たちは、それぞれ異なる、多様な研究に取り組んでまいりました。それぞれの研究が、今回の感染症禍の他、環境変動やエネルギー問題、自然災害対策、貧困問題など、日本や世界が直面している様々な問題に何かしらの形で関わっているのではないかと思います。

私は、社会科学・自然科学を横断し、幅広い学問分野が集う総合文化研究科広域科学専攻において、生態進化学の研究に携わってきました。具体的には、湖沼から堆積物を採集し、その中に生物が残す身体の一部や卵を用いて、湖沼が形成された時代から現在までで、湖沼生態系がどのように形成されどのように変わってきたか、生態系を構成する生物はどのように環境変動に適応したかといった、長期的な変化を明らかにする研究に取り組みました。この研究がそのまま世界が抱える大きな問題の解決策として直結することは到底ありません。しかし、この研究で取り組んだ、自然条件下の生態系の変動をありのままに理解することは、環境変動下において自然環境や生物を維持すること、現在危機に瀕している生物多様性の保持に不可欠な視点・知見になるものです。本当のところ、かつては、自分の研究がいかに人間社会やより大きな問題に貢献するかについて、研究費の申請のためにとってつけたように考えるのが常でした。しかし、これまでの研究活動を通し、基礎的な研究の一つ一つが、人類や地球が抱える大きな問題に何かしらの形で将来的に寄与していくのではないかと考えるようになりました。併せて、自身が関わる研究分野の発展や進歩への寄与を目指すことは勿論のこと、大きな問題に繋がる応用的な見方を倦厭せずに視野を広く持つことや、人類の直面する課題に対して、自身が携わる研究分野に関与する部分での問題や課題が見受けられないか、それはどのようなものかを考えてみることの重要性を感じるようになりました。また、多くの人が自分事として科学に親しめるようにするためにも、このような多岐にわたる課題や、それにおける自身の研究や関連学問分野の関連や重要性を広く発信することは、研究の経験を経た私たちが、現在の世界において果たすべき責務の一つではないかと思います。

本日より私たちは、それぞれの選択した道へ歩んでいきます。その中で、これまでの研究経験、科学を学んだ経験を活かし、科学に携わる者として、科学を学んだ者として、科学の発展に加え、世界や日本が直面する問題の解決に、それぞれの方法で貢献できるよう邁進していく所存です。

最後になりましたが、本日に至るまで、研究や研究者の在り方、及び、各種学問分野について多岐にわたるご指導・ご鞭撻を下さいました諸先生方、共に研鑽を重ねた同輩・先輩・後輩の皆様、研究活動を支えて下さいました職員の皆様や家族に、修了生一同、改めまして心よりお礼申し上げます。皆様のご健康と益々のご清栄を祈り、また、如何様の状況下であっても変わらぬ東京大学の更なる発展を確信しつつこれを祈念し、答辞とさせて頂きます。本日は誠にありがとうございました。

答辞

数理科学研究科博士課程
甘中一輝さん

本日は新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、私たちの為にこのような式典を挙行していただき、修了生を代表して心より感謝申し上げます。また、五神総長からは温かい激励のお言葉を賜りましたこと、重ねて感謝申し上げます。私たち修了生は「新しさ」を追求し、不断の努力を続けてまいりました。日々の試行錯誤の繰り返しの中で、十人十色の物語があったと思います。恐縮ながら私個人の経験を紹介させていただきますと、大学院では、従来型の枠組みのリーマン多様体を舞台とするのではなく、一般相対論で時空間のモデルとして用いられるローレンツ多様体のような、不定値計量を有する多様体における大域解析の新理論を学び、研究しました。2年前、パリの美しい景色を眺めながらセーヌ川沿いを一人でひたすら歩いていた時に研究のアイデアが偶然生まれたことを懐かしく思い出します。

有難い事に、東京大学には私たちが研究のみに集中できる環境やチャンスを出来る限り提供していただきました。しかし、大学院での私の研究生活は決して順風満帆なものではなく、手掛かりが見つからず前進すらできない事がほとんどで、やっと前進できたと思いきや実は全くの遠回りであったという事の繰り返しでした。まだ誰も答えを知らない問題に立ち向かい「新しさ」を追求する時、これまでにない気持ちの昂ぶりを覚える一方で、答えが得られたとしても面白い発見につながるかどうか分からない不安、そして孤独感も嫌というほど味わいました。私は、5年間の大学院生活を通して専門性だけでなく、「粘り強さ」を獲得できた事を誇りに感じております。

また、今年度は予期せぬ新型コロナウイルスの感染拡大により社会に様々な変化が生じました。比較的影響が少ない様に思われる数学界でも、他研究者と会話を交わす機会、遠出して新たな空気を取り入れる機会が以前と比べて圧倒的に減少し、研究のきっかけが少なからず失われたように感じます。しかし、東京大学からは様々な形でサポートしていただき、自己研鑽に励む時間や研究時間を多く確保できた為、私にとっては幸運な事に負の側面ばかりというわけでもありませんでした。

明日から私たちは、東京大学大学院の修了生として三者三様の道を歩むこととなります。社会から私たちへ向けられる期待を自覚し、いつ何が起きるか分からないこの世界で、常に臨機応変かつ前向きに対応できるよう心掛けなければなりません。これまで社会から受けた御恩を還元し、少しでも明るい話題を提供できるよう、謙虚に邁進していく所存です。

最後になりますが、今日までご指導ご鞭撻を頂きました先生方、共に切磋琢磨した友人たち、研究生活を支えてくれた家族に心より厚く御礼申し上げます。皆様のご健康と東京大学のさらなるご発展を祈念いたしまして、答辞とさせていただきます。

10年間にわたる全学の多様な支援活動にひとまずの幕

復興支援シンポジウム録

シンポジウムは伊藤国際ホールと東北の3自治体をつないでZoomウェビナーで行われました

Ⓐ被害を受けた国際沿岸海洋研究センター。Ⓑ2011年4月、大槌を視察する濱田総長。Ⓒ2011年5月に遠野分室を開設。大槌連絡所とともに支援の拠点に。Ⓓ被災地の要請に応えて必要な物資を輸送。ⒷⒻ学生や教職員有志のボランティア隊が様々な支援を展開。Ⓖ学習機会を奪われた地元中学生を学生が支える学習支援ボランティア。ⒽⒾ救援復興に関する活動を認定するプロジェクトには、まちづくり、防災から放射線関連まで96件が登録。（上映ビデオより）

「科学への不信」を忘れずに

津田●今日集まったのは多様な支援の中でも特に中核的な活動をしてきた皆さんです。お一人ずつ振り返ってお話しください。

濱田●当時、大槌を訪れて街を見渡したときの思いが忘れられません。記者から言葉を求められ、しばらく考えましたが、結局「言葉にできません」と言いました。そうとしか言えない衝撃でした。10年を経て映像で大槌の姿を見て、希望が湧くのを感じます。先の挨拶で絆を忘れないと話しましたが、もう一つ重要なテーマは、科学に対する不信です。地震や津波の予測ができなかったこと、原子力を制御できなかったこと、放射線について必ずしも統一した見解を出せなかったことなどが科学への不信を呼んだことを忘れてはいけないと思いました。災害のような限界的な状況では日頃の研究に意味があるのか否かが問われる。そんな思いを持ちました。学問に携わる者はそこを認識し緊張感をもって社会と向き合うことが必要だとあらためて思います。

河村●私は7年間大槌にいて、5年間は沿岸センター長を務めました。震災で三陸の海の生態系がどんな影響を受けたのかを科学的に解明するという研究所の新たな使命ができたと思っています。昭和48年設立のセンターには海洋研究で蓄積したデータがあり、震災以前と以後を比較できる、被災した研究所でないとできない貴重な環境が揃っているのです。津波で研究棟が被害を受けましたが、地元の多大な協力を得て高台への移転が叶いました。2018年度には社研と「海と希望の学校」を始め、海を基盤にローカルアイデンティティを育む若者の育成を進めています。地元の学校への出前授業を続け、高校生がセンターに頻繁に出入りするようになりました。地域とともに考える海洋科学拠点として歩み続けます。

玄田●釜石とは希望学のプロジェクトで2005年から交流がありました。希望をもって生きる人は困難を経験したことが多いと気づき、そのプロセスを学ぼうと訪ねたのが釜石でした。最初は言葉もわかりませんでしたが、そのうち言葉はわからないが言いたいことは伝わるようになりました。あるとき呑兵衛横丁で「一生つきあいたい」と地元の方に打ち明けた辺りから関係が深まった気がします。そうした経緯の後、2011年に大震災が発生。復興支援室は一生かけてつきあうための架け橋でした。室は幕を閉じますが学者は一生研究を続けられます。今後も安心して東大とつきあってください。挫折を希望に変えるには何が大切かと釜石で聞いたら、「わかってくれる人が3人いれば大丈夫」と言われました。一生東北と関わる研究者は東大に3人に限らずいます。今後もよろしくお願いします。

大月●2011年5月、本田市長、野田市長、平野町長にお会いしました。当時、孤独死が増える危惧があり、高齢社会総合研究機構でコミュニティ型仮設住宅を提案したところ、皆さんはすぐ賛同してくれました。日本初の事例となり、その後、別の被災地にもつながり、現場の首長の判断があればかなりのことができると示せました。復興支援の活動は学生にとってもよい機会でした。私の研究室出身の学生が岩手県住田町の職員となり、仮設住宅の跡地を活用してまちづくりを進めています。学生に様々なチャンスをくれた地元の皆様に感謝です。

物語を書庫にとじこめないで

秋光●震災直後に南相馬に入りました。被災地に立ち、私も言葉が出なかったことを思い出します。南相馬を拠点に放射性物質の調査や除染を進め、自治体と連携しながら地域住民への説明会も繰り返しました。小さい子がいるお母さん方の苦しみは大きく、話を聞いてもらい泣きしたのを覚えて

※上記は抄録です。言葉は適宜省略されている場合があります。

3月25日、シンポジウム「東京大学東日本大震災復興支援の10年～復興支援活動と未来～」が開催されました。3月末の復興支援室閉室を受け、10年間にわたる本学の復興支援活動を振り返ろうというものです。震災当時の濱田総長、復興支援に深く携わった学内関係者、そして本学の支援活動に多大なご理解ご協力を賜った3自治体の首長さんにもご参加いただいたパネルディスカッションの言葉を抽出して紹介します。

復興支援シンポジウム プログラム

開催挨拶	総長　五神 真 国土緑化推進機構理事長・前総長　濱田純一❺
ビデオ上映	
パネルディスカッション	
閉会挨拶	理事・副学長　藤井輝夫

司会：復興支援室長・副学長　津田敦❽

Ⓒ

Ⓓ

Ⓔ

Ⓖ

Ⓗ

Ⓘ

います。2018年に文科省の復興知事業が始まってより組織的に関わるようになり、知見を駒場生に伝える授業を行って『福島復興知学講義』という本を出しました。博物館や楢葉町と提携して資料の展示も行い、取組みを次代に伝えています。私も一生つきあう覚悟と地元の方に話してきました。書庫に物語をとじこめずに活動を続けます。

村田●畜産の現場では原発事故後に多くの牛が残されました。私たちは牛200頭を集めて原発から約5kmの山に牧場を作り、飼育しながら長期低線量被曝が牛の甲状腺に及ぼす影響を測定してきました。10年の調査の結果、被曝が原因と思われる顕著な異常は見つからず、放射性物質を含む餌を与えなければ肉も安全とわかりました。マウスと違い長生きする牛は実験動物としても有効でした。私も科学への不信を実感し、東大なのになぜできないのとよく言われました。あらためてこの言葉を噛み締め、研究が復興につながることを願います。

中村●2011年3月、大学院進学直前の私は、インドとバングラデシュで現地調査をしていました。そこで大震災が起き、現地の人々に心配され、日本が支援する側からされる側になった思いがしたものです。帰国後、授業の一環で大槌に入りました。復興がなぜ進まないのかが疑問で、卒業後、6年9か月間大槌町職員として勤めました。東大とは支援学生の受け入れ、研究者とのやりとり、岩手赤門会などでご縁がありました。大震災で亡くなられた方々の生前の記録を残す業務や、身元不明のご遺骨を納める業務などを、どうやったら亡くなられた方々や、ご遺族を始め町民に寄り添えるか、悩みながら取り組むうち、大槌の方々と一時的でない関係ができたと思います。震災復興に限らず、大槌を始め地方が直面する課題に対し、一生というスパンの中でどのように役に立てるか、模索していきたいです。

学術の価値も再認識の10年

本田●遠野には海がない、津波は来ないから関係ない、ではなく、だからこそ後方支援の役割がありました。忘れてはならないという思いで全ての後方支援の記録を資料館に展示し、地域や人がどうつながれるかを次世代に伝えようとしています。3月にリニューアルした資料館には東大分室の記録もあり、あったかみのある木造仮設住宅も展示しています。産学官民の連携は災害続きの現代でますます重要です。研究は一生続くという言葉が印象的でした。市町村が学問に関わる中から地域の底力を発揮することが復興を進めると信じています。

野田●学術への不信の話がありましたが、一方で学術の重要性を再認識する10年だったと思います。この10年で重要な水産物が減りました。津波のせいというより地球温暖化の影響だと判明しました。台風の東北直撃の脅威も明らかとなり、さらにコロナ禍です。当時は10年たてば安全な町ができると思いましたが課題は依然残ります。サステナブルとレジリエンスは住人だけの力では生まれません。東大の力も必要です。一生つきあえるならうれしいです。

平野●町の人口は減り、高齢化が進んでいます。サケやサンマも獲れなくなっていますが、地に足をつけて希望をもって進みたいと思います。町民だけでなく、外の人とのつながりが大事で、なかでも東大は大きな存在です。町づくりのための知恵を貸してください。これからこそが復興だと思います。空地が多くても希望をもって、前を見据えて、熱い気持ちをもって前に進みたいと思います。東大にはこれからも灯台であってほしい。皆が悩んでいるときに光を放つ存在であってほしいと願っています。

津田●10年を節目に、新しい地域連携としての活動が芽吹いているようです。次の10年もどうぞよろしくお願いいたします。

海と希望の学校 in 三陸

第13回

岩手県大槌町にある大気海洋研究所・国際沿岸海洋研究センターを舞台に、社会科学研究所とタッグを組んで行う地域連携プロジェクト──海をベースに三陸各地の地域アイデンティティを再構築し、地域の希望となる人材の育成を目指す文理融合型の取組み──です。4年目を迎えたわれわれの活動や地域の取組みなどを紹介します。

「『第1回 三陸マリンカレッジ』学習成果発表会」開催

北川貴士 大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター 准教授

第12回の記事で、昨年12月末に合宿形式での実習『第1回 三陸マリンカレッジ』を岩手県沿岸広域振興局と共催し、生徒各自が海についての関心のあることに基づいて学習テーマを決めたことをお伝えしました（no.1543 / 2021.2.19）。3月14日に学習の成果発表会・三陸マリンカレッジ修了証書授与式を釜石市市民ホール「TETTO」で行いました。

✦✦✦✦

当日は、社会科学研究所・教授の玄田有史先生にご講演いただいた後、5人の生徒さんに、国際沿岸海洋研究センター・スタッフらの指導を受けながら進めた調べ学習の成果を発表していただきました。発表に対して玄田先生と私（北川）が質問・コメントをいたしました。

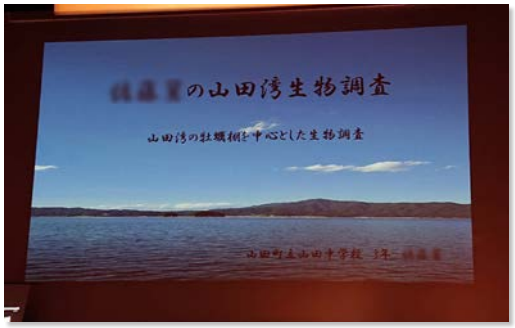
大船渡市から参加の生徒さんは、湾口が狭くなっている大船渡湾の地形がカキやホタテの養殖に及ぼす影響についての発表をしてくれました。また、山田町から参加の生徒さんは、山田湾のカキ棚周辺に生息する生物の調査を行い、カキ養殖が周辺に生息する生物の多様性を生んでいる実態を明らかにしてくれました。5人の発表後、大槌高等学校・はま研究会（詳しくは第10回記事（no.1539/2020.10.26）をご覧ください）のメンバーにも、昨年度に取り組んでくれた研究の成果について発表をしていただきました。最後に修了証書の授与式を行って閉会いたしました（当日欠席の1名にも3月25日にセンターで成果発表をしていただき、修了証書を授与いたしました）。

第1回「三陸マリンカレッジ」学習成果発表会（釜石市市民ホール「TETTO」にて）。玄田教授の講演に耳を傾ける参加生徒さん

今回参加してくれた生徒さんは、1月以降、コロナ禍のなか、部活、定期テスト、入試や卒業式など忙しい合間をぬってテーマ学習に取組んでくれました。発表会のあと、ある生徒さんは「参加する前は海にあまり関心がなかったけど、参加してみて、海に興味を持つようになりました」と話してくれました。今回のマリンカレッジを通して、生徒さんに海への関心を持ってもらえたことをうれしく思います。彼らの海への純粋な好奇心を大切にしてあげたいと思いますし、こういった生徒さんをもっと増やせるよう、また、生徒さん同士の繋がりも広げられるよう、今年度以降も本イベントを続けたいと思っております。

✦✦✦✦

「海と希望の学校 in 三陸」は4年目を迎え、本事業の取組み内容はますます充実してきました。今年度早速、書籍『さんりく 海の勉強室』を刊行いたしました。施設「おおつち海の勉強室」も完成し、4月18日にオープン式典を行いました。本コラムでは今年度も引き続き本事業の取り組みについて紹介していきます。どうぞお楽しみに。



会場に映し出された成果発表スライド。綺麗に作成してくれました（一部画像を加工してあります）

『さんりく 海の勉強室』（青山潤・玄田有史編：岩手日報社　4月10日刊　AB判102ページ　1,300円＋税）。三陸の海の小ネタを散りばめました

「海と希望の学校 in 三陸」動画を公開中→ YouTube サイトで 海と希望 と検索！　制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）

シリーズ　第33回

連携研究機構

「不動産イノベーション研究センター」の巻

話／機構長
柳川範之先生

社会変革の核となる不動産を探究

――不動産の研究で変革を起こす機構、でしょうか。

「近年、社会変革が不動産を中心に起こりつつあります。わかりやすいのはスマートシティでしょうか。随所にセンサを設置して得た膨大なデータを都市開発や新サービスにつなげることが期待されています。ビルや住宅といった不動産をデータ社会のコアとして活用することは、世の経済活動や利便性に強く影響します。この大きな動きを的確に捉え、適切な情報発信をするのが機構の役割です。リーマンショックを見ればわかるように、不動産価格の変動で社会は大きく影響を受けますが、そのメカニズムはこれまであまり研究対象になってきませんでした。総合大学の強みを活かして複数部局で連携しながらこの分野の研究を進めます」

――不動産価格決定の際の法則を探すのでしょうか。

「野菜などとは違い、不動産には取引の制度が関係する部分が大きい。需要が大きいと価格が上がるという単純な法則では決まりませんが、適正な取引を妨げる仕組みがあるなら是正したほうがいい。たとえば空き家が象徴的です。普通に考えれば安い家賃でも貸したほうがいいのに、現実には空き家が多い。価格以外の複雑な問題があるわけです。そこを解き明かし解決策を出せれば、学術的にも社会的にも価値があります」

――不動産学という学術分野もあるわけですね。

「というより、経済学の不動産研究があり、法学の不動産研究があり、工学の不動産研究があるというイメージ。不動産には多様な側面があります。IoTの舞台であり、マクロ経済の変動ファクターでもあり、特に日本では人生に占める役割が大きいという面も見逃せません。不動産購入は人生の一大事でしたが、コロナ禍ではそれが一番ではないかもしれない。テレワークなら都心より安く広い家に住める地方のほうがいいのか、ビジネス街のオフィス需要はどうなるのか、テレワークが増えると住居への投資が増えるのか……。まだ見えないことばかりですが、機構はそこに切り込んでいきます。空き家のような不動産に関する制度の改善、不動産データのインフラ整備、Prop Tech※による不動産業の高度化、政策提言と社会実装といった4つのプロジェクトをすでに始めています。新しい生活様式の出現とともに機構が発足したことを前向きに捉え、人の暮らしに焦点をあてる形での不動産の役割も考えたいと思います。同種の機構は知る限り日本では他になく、社会からは驚きと歓迎を示されているようです。CREI※のロゴのように、未来に向けて広がっていきたいですね」

www.crei.e.u-tokyo.ac.jp

※Property + Technology　※Center for Real Estate Innovation

UTokyo　第25回

バリアフリー最前線！

バリアフリー支援室特任助教
中津真美

オンラインで情報を保障すること
視覚障害学生・聴覚障害学生への支援

昨年度からオンライン授業が始まり、「視覚障害や聴覚障害の学生にも、遠隔で情報を伝える」という新たな支援が開始されました。ただでさえ情報弱者といわれる学生たちへの支援です。様々なICT技術を駆使しますが、限界を感じることもあります。ですが、配付資料の工夫や事前共有、話し方の工夫などがあるだけで、授業の理解度が格段に上がると学生たちは言います。

例えば教員が、配付資料の図表を文章にもすることで、視覚障害学生は音声読み上げソフトを使用して図表の内容を耳で聞くことができます。対面授業のように、誰かが隣で図表の内容を説明する支援はできませんが、図表の文字情報などを事前に学生に共有しておくことで、学生は安心してオンライン授業を受講できるようです。さらに、授業中も、指示語は具体的な説明に置き換え、明瞭な話し方がなされることにより、学生サポートスタッフも活動がしやすくなったと言います。聴覚障害学生への遠隔PCテイクを担う学生サポートスタッフからは、「適度な速度や一定の間がある話し方の授業は、余裕を持って入力できた」「授業の情報を概ね損失なく聴覚障害学生へ伝えられた」とのコメントが寄せられました。

先生方のコメントも心に残ります。「私どもとしては、支援をしている意識はなく、当然のこととして『丁寧にできる説明は、できるだけ丁寧に』という原則を貫いているだけです」

オンライン授業では、周囲の少しの配慮があれば、より障害のある学生の機会の平等に繋がることが分かってきました。「障害」とは、多数派と少数派の間のミスマッチにより発生するものとすれば、少数派だけが頑張るような文化は、もう終わりを迎えるのかもしれません。

バリアフリー支援室　ds.adm.u-tokyo.ac.jp

ワタシのオシゴト 第179回

RELAY COLUMN

本部国際交流課
学生派遣チーム 園田竜也

コロナ禍でも続く、学生の留学支援

ムードメーカーな愉快な上司が撮影

主に全学交換留学を担当しています。と聞くと、「コロナ禍で仕事が激減しているのでは？」と思われるかもしれませんが、そんなことは断じてありません（笑）！コロナ禍以降、留学支援の現場は厳しい状況が続いていますが、運営に携わる教職員は、学生が安心して留学に挑戦できる環境が1日も早く訪れることを心の底から願い、学生が飛び立つ1年以上前から、学内募集や審査、協定校への推薦などの業務に励んでいます。と偉そうなことを書きましたが、実際は2月に課内異動で着任したばかりで、周りのすこぶる優しい皆さんに助けていただき（感謝）、なんとかやっています（汗）。入職時からの希望であった国際（学生支援）系の業務に携わる機会を与えてもらい、能力的適性はさておき、やりがいを感じています。

私生活では、コロナ禍以前は愛する同期など職員の皆さんと週1で飲み、年に数回旅行に行っていましたが、この1年程は自粛し、ただただもどかしいばかりです。和気藹々と美味しいものを食べられる日々が早く戻ることを期待しています。

砂浜ドライブin金沢（ペーパードライバー）

得意ワザ：①落ち着いているフリ、②後輩に舐められる
自分の性格：顔が険しいが基本穏やか、寡黙だが交流好き
次回執筆者のご指名：森脇誠也さん
次回執筆者との関係：愛する後輩兼友達
次回執筆者の紹介：気が利く爽やかイケメン

デジタル万華鏡

東大の多様な「学術資産」を再確認しよう

第23回 総合研究博物館准教授 佐々木猛智

クランツ化石コレクション

化石を扱う研究分野は古生物学と呼ばれ、地質学と生物学の境界領域に位置する。東京大学における古生物学の創始者は「ナウマンゾウ」で知られるナウマン(Heinrich Edmund Naumann)であり、帝国大学の前身開成学校の教師として明治8年に招聘された。そして、古生物学の研究のためのリファレンスコレクションとして収集されたものがクランツコレクションである。

クランツコレクションの例。アンモナイト、二枚貝、カニ、サメの歯、哺乳類の骨の化石

明治8年には開成学校が標本を輸入した記録があり、ナウマンの赴任にともなって輸入されたものであると考えられる。クランツとは、鉱物学者であり標本商でもあったクランツ博士（Adam August Krantz）を指している。クランツ博士はドイツのフライベルクで1833年に鉱物化石の標本商を創業し、1850年にボンに移転し、現在も研究用品や標本を扱うクランツ商会としてボンに存続している。クランツ標本は専門的な研究の参照用として用いられただけでなく、教材として活用されてきた。現在も理学部の古生物学の実習ではクランツ標本を観察する時間を特別に設けているが、明治8年以来続く伝統であることを説明すると学生は一様に感銘を受けるようである。クランツ標本の産地はドイツ、フランス、イギリス等ヨーロッパが多く、さらにアメリカ、ロシア等の化石も追加されている。クランツ商会以外に由来する標本も加えて6000点以上に達する大コレクションであり、明治時代の化石コレクションとしては国内随一の豪華なものであったと思われる。現在では19世紀の古生物学を記録する貴重なコレクションになっており、電子化によりインターネット上での画像公開が進められている。

クランツ標本のオリジナルラベル（上）。開成学校のラベル（下）

umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DKoseibu/Krantz/list/recordlist.php

インタープリターズ・バイブル 第164回

理学系研究科教授
科学技術インタープリター養成部門
塚谷裕一

エセ科学に騙されないよう教えるには?

最近、一般向けの科学テレビ番組制作に関連して、なんどか制作会社の方々と企画案を議論する中、科学リテラシーについて話していて、一つ思いついたことがあった。いままでのエセ科学対策本は、目標をかけ違えていたのではないか、ということである。

エセ科学に騙されないための心構えを説く書は多い。しかしそれらはこれまで、あまりに馬鹿正直に、国民全体の科学リテラシーの向上を目指してきた。

たしかに世にはびこるエセ科学は、義務教育レベルの理科、あるいはせいぜい高校レベルの化学、物理、生物を身に着けていれば、一瞥で嘘がわかるくらい初歩的なものばかりだ。だから正しい科学を身に着けよう、というのがこれまでの対策案だった。しかし身に着けるべき知識は理系分野だけではない。あらゆる知識体系について高校レベルまでマスターせよというのは、やはり無理な相談だ。そう考えると、エセ科学に騙されたくなければ科学リテラシー向上に努めてほしい、というのは、やや的はずれな助言である。

なのでこの考えはやめよう。ではどうしたら良いか。

そこでヒントになるのが、エセ科学の、言葉を見ただけで「ありえない」と思わせる「変」さである。私達からすればなぜこんな見え透いたエセに騙されるのか、と思ってしまうが、実は見え透いているからこそ騙されるのだ。天然イオン配合、水素水、オゾンによる血液クレンジング。共通するのは、誰もが目にしたことのある科学用語を含む点だ。騙される人たちは、これらの言葉に科学っぽさを感じ、凄いものという幻想を抱いてしまうのだろう。聞いたことはあるけれどよく理解はしていない言葉、そういうものに人は弱い。エセ科学で儲けんとする側は、そこにつけ入り、多くの人が聞いたことはある、しかしよくは理解していない科学用語を全面に押し出すのだ。なぜこんなものに引っかかるのか、という安直なものばかりなのは、実はこうした騙しのテクニックのせいなのである。

そうとなれば、対策は一つ。「正確な意味を知らない言葉を使った話は信じない」という一行に集約できる。今までエセ科学対策のための多くの本が述べてきたような、疑う姿勢という助言は、たしかにそうだが、抽象的すぎる。世に出回るエセ科学対策に話を絞れば、上のように言い換えたほうが効果的ではなかろうか。

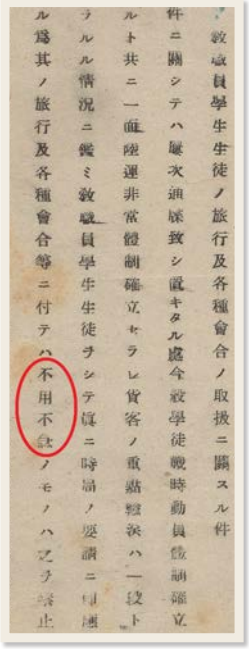
科学技術インタープリター養成プログラム
science-interpreter.c.u-tokyo.ac.jp

蔵出し! 文書館 The University of Tokyo Archives 第31回

収蔵する貴重な学内資料から
140年を超える東大の歴史の一部をご紹介

「不用不急」が求められる中で

今ではよく耳にするようになった「不要(用)不急」という言葉ですが、実は戦時中にも使われていました。『文部省往復』「教職員學生生徒旅行並に各種會合取扱に関する件」(S0001/Mo234/0017)では、1943(昭和18)年、文部次官から大学総長宛で教職員や学生生徒による旅行や各種会合等について「不用不急」のものは禁止し、実施できるものの詳細が記されています。前後の資料を見てみると、この旅行等の制限の初出は1941(昭和16)年で、夏期休暇が始まる時期の鉄道輸送の逼迫を懸念して、全国的な体育大会等の会合は当分延期し、再開の指示が無い場合は中止するよう呼びかけられています。教職員や学生の団体旅行も特に指示するもの以外はたとえ文部省主催でも中止し、個人的な旅行は「厳ニ差控ヘ」るよう指示されています(S0001/Mo222/0010)。1944(昭和19)年になると、年末年始の一般旅行と軍所属者の帰省旅行までもが抑制されることになります(S0001/Mo237/0021)。「不用不急」の旅行等の制限が呼びかけられた1943(昭和18)年は学徒戦時動員体制や陸運非常体制が確立してきており、軍事目的の輸送強化を受けての措置でした。


教職員學生生徒ノ旅行及各種會合ノ取扱ニ關スル件
件ニ關シテハ屢次通牒致シ置キタル處今般學徒戰時動員體制確立
ルト共ニ一面陸運非常體制確立セラレ貨客ノ重點輸送ハ一段ト
ラルル情況ニ鑑ミ教職員學生生徒ヲシテ寧ニ時局ノ要請ニ同調
ル爲其ノ旅行及各種會合等ニ付テハ不用不急ノモノハ之ヲ禁止

一方で制限のある中、大学附設の研究所や演習場等での実習や研究など「教育上正科トシテ実施」するものについては鉄道の利用が許可されていました。また五月祭も1943(昭和18)年までは開催されており、映画会や音楽会、庭園の公開などが行われました(『五月祭 昭和16年〜昭和26年』S0359/SS01/0001)。制限がある中でこうした活動が継続されていたことは注目に値します。「不用不急」の旅行等が制限される厳しい社会情勢の中でも、大学が教育研究を維持し主体的に動こうとしていた姿が感じられるようです。

(学術専門職員・井上いぶき)

東京大学文書館
www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/

トピックス

全学ホームページの「UTokyo FOCUS」(Features, Articles）に掲載された情報の一覧と、そのいくつかをCLOSE UPとして紹介します。

掲載日	担当部署・部局	タイトル（一部省略している場合があります）
3月15日	本部情報環境課、情報基盤センター	【通知】基幹ネットワークの停止を伴う機器および回線移設作業のお知らせ
3月15日	情報基盤センター	情報基盤センター・国立情報学研究所柏分館合同開所式が開催されました
3月15日	総合文化研究科・教養学部	広域科学専攻の佐藤守俊教授が市村学術賞を受賞
3月16日	新領域創成科学研究科	久田俊明名誉教授、杉浦清了名誉教授に日本学士院賞の授賞が決定
3月16日	大学総合教育研究センター	最終案内「大学で教える」を学ぼう。東大 FFP 大学教育開発論　第 17 期受講者募集！
3月17日	本部国際戦略課	キャンパスの脱炭素化に関する国際ワークショップ GAUC Campus Decarbonization Workshop を開催
3月17日	グローバルキャンパス推進本部	第 6 回戦略的パートナーシップシンポジウム開催
3月18日	教育学部附属中等教育学校	教育学部附属中等教育学校で 70 回生卒業証書授与式行われる
3月18日	本部総務課	令和 2 年度東京大学卒業式を挙行
3月18日	薬学系研究科・薬学部	一條秀憲教授に日本学士院賞の授賞が決定
3月18日	本部広報課	未来のキャンパスのヒントを分野の異なる学生たちが提案（赤門脇トイレデザインコンペ）
3月18日	教育学研究科・教育学部	国際学術交流会をオンラインで開催しました
3月18日	生産技術研究所	英文広報誌「UTokyo-IIS Bulletin」Vol. 7を公開しました
3月19日	本部総務課	令和2年度東京大学学位記授与式を挙行
3月19日	本部国際戦略課	「Global Fellow」の称号制度がスタートします
3月19日	広報戦略本部	痛くない高精度乳がん検査装置で女性を救う｜Entrepreneurs 05
3月23日	大学総合教育研究センター	東京大学フューチャーファカルティプログラム第16期履修証授与式を開催
3月23日～4月7日	本部広報課	現総長と次期総長が語るこれまでとこれからの6年間、東京大学クロニクル ｜「淡青」42号より
3月24日	グローバルキャンパス推進本部	2021 Princeton-UTokyo Dayを開催しました
3月25日	本部国際戦略課	日印交流プラットフォーム構築プログラム(JIEPP)　第3回シンポジウムを開催しました
3月25日	理学系研究科・理学部	裏しかない葉が平たくなるための座標が判明　オーキシンを手がかりに葉を平たくする
3月25日	総合文化研究科・教養学部	言語情報科学専攻の大関講師が言語処理学会で最優秀賞を受賞
3月26日	本部学術振興企画課	東京大学とNICTとの新たな連携協定の締結～Beyond 5G/6G分野及び量子情報分野の連携強化
3月26日	大気海洋研究所	過去に起こった大規模な東南極氷床融解　昭和基地周辺の湖が記録していた縄文時代の融解イベント
3月29日	総合文化研究科・教養学部	深層学習によるデータ固有のフラクタル構造などへの適応を証明
3月30日	本部社会連携推進課	2020年度　オンライン形式によるFS地域交流会活動報告会開催
3月30日	本部社会連携推進課	2020年度　体験活動プログラム報告会開催
3月30日	医学系研究科・医学部	TGF-ßを介したがん微小環境リモデリング機構の発見
3月31日	本部社会連携推進課	復興支援シンポジウム「東京大学東日本大震災復興支援の10年　～復興支援活動と未来～」を開催
3月31日	本部経理課	東京大学FSI債が「DEALWATCH AWARDS 2020」の「Debut Debt Deal of the Year」を受賞
3月31日	未来ビジョン研究センター	シンポジウム「学際的科学から解決策を考える食料、水、気候、生態系の持続可能な開発目標」を開催
3月31日	本部広報課	東大144年の一コマとしての6年間｜総長室だより第30回（最終回）
4月1日	本部広報課	藤井 輝夫 新総長が就任
4月2日	宇宙線研究所	飛騨市神岡振興事務所に神岡宇宙素粒子研究施設サテライトオフィスを開設
4月2日	広報戦略本部、総合文化研究科・教養学部	「草の根の中国」を追いかけて　4つの農村の定点観測から浮かび上がる「本当の」中国
4月5日	本部経理課	3東京大学FSI債がキャピタル・アイの「BEST DEAL OF 2020」(財投機関債等部門）を受賞
4月6日	本部博物館事業課	IMT学生ボランティア募集
4月6日	広報戦略本部、情報学環・学際情報学府	10年目の福島で、「現在進行形」の災害をどう伝えるかを学ぶ
4月7日	総合文化研究科・教養学部	諏訪雄大准教授が令和3年度科学技術分野の文部科学大臣表彰若手科学者賞を受賞
4月7日	法学政治学研究科・法学部	第七回東京大学―北京大学フォーラムを開催しました
4月7日	法学政治学研究科・法学部	第四回東京大学―ソウル国立大学フォーラムを開催しました
4月7日	工学系研究科・工学部	東京大学ー清華大学 オンライン学生交流イベント

CLOSE UP　3分で研究の魅力を紹介して国際大会に出よう！　（広報戦略本部）

3MT（Three Minute Thesis）コンペティション出場者募集

↑第1回東大大会の参加者と審査員の皆さん。←第2回東大大会（オンライン開催）で見事優勝した理学系研究科化学専攻の中川悠太さん

Three Minute Thesis（3MT）コンペティションは、博士課程の大学院生が3分間で自分の研究について発表する一大イベントです。英語で行うプレゼンテーションで使用できるのは一枚のスライドのみ。研究者としてやっていくのに必要なコミュニケーションスキルを向上させ、キャリアアップにもつながるかもしれないチャンスです。2008年にオーストラリアのクイーンズランド大学で始まったこのコンペに、東大も2019年から参加しており、3回目となる東大大会が、きたる7月17日に開催されます。優勝者には、賞金（研究助成金）30万円に加えて、10月にオーストラリアで開催される大会に参加する権利をプレゼント。昨年に続いてオンライン開催となる今回は、優勝、準優勝（賞金20万円）にプラスして、学内構成員の投票によるピープルズ・チョイス賞（賞金10万円）も用意しています。少しでも興味がありそうな博士課程の学生さんが近くにいたら、ぜひ参加を促してあげてください。スライドと必要事項の提出締切は、5月16日（日）となっています。

問い合わせ：広報戦略本部
events.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

CLOSE UP　部局長交代のお知らせ

4月1日付で部局長の交代がありました。

	新部局長	前部局長
大学院医学系研究科・医学部	**岡部繁男**	齊藤延人
大学院人文社会系研究科・文学部	**秋山 聰**	大西克也
大学院農学生命科学研究科・農学部	**堤 伸浩**	（再任）
大学院経済学研究科・経済学部	**星 岳雄**	渡辺 努
大学院総合文化研究科・教養学部	**森山 工**	太田邦史
大学院教育学研究科・教育学部	**小玉重夫**	秋田喜代美
大学院新領域創成科学研究科	**出口 敦**	大崎博之
大学院情報学環・学際情報学府	**山内祐平**	越塚 登
医科学研究所	**山梨裕司**	（再任）

	新部局長	前部局長
地震研究所	**佐竹健治**	（再任）
社会科学研究所	**玄田有史**	佐藤岩夫
生産技術研究所	**岡部 徹**	岸 利治
史料編纂所	**本郷恵子**	保谷 徹
定量生命科学研究所	**白髭克彦**	（再任）
物性研究所	**森 初果**	（再任）
大気海洋研究所	**河村知彦**	（再任）
附属図書館	**坂井修一**	熊野純彦

コロナ禍 vs 東大 Now　新型コロナウイルス情報WG発

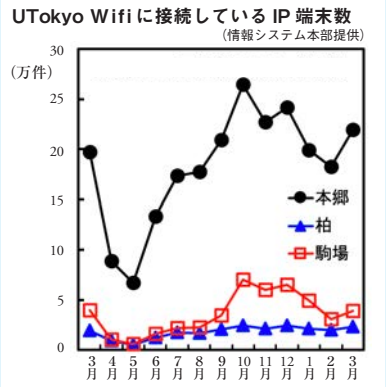
第5回／コロナ禍下の各キャンパスのアクティビティ

4月に入り、中国から始まったコロナ禍がわが国に及んで早くも2回目の年度始めを迎えました。この間、キャンパスの安全をできる限り確保しつつ、学びと研究を止めないよう、大学を挙げて努力が続けられています。

キャンパス内での活動の度合いを測る指標の一つに、学内無線ネットワーク（UTokyo Wifi）の接続端末数があります。これは、構内でWiFiに接続しているIPv4アドレス数を計測したものです。端末数だけをカウントしていて、構内滞在者の実数を示すものではありませんが、相対的な傾向をうかがうことはできます。

グラフを見ると、これまで紹介したデータと同様、昨年4、5月に急減したのち回復に転じたことがわかります。同時に、各キャンパスの特性が傾向に表れています。本郷・駒場両キャンパスは、ともに5月以降回復してAセメスターは比較的高い水準を保ち、授業期間が終わった2月に再び低下するという傾向を示します。一方、数値を見ると、人数規模で駒場は本郷の4割程度とはいえ、差はそれ以上開いています。これは、同一カリキュラムで学ぶ前期課程生が多い駒場では慎重に入構者数を制御していることの反映と考えられ、とりわけSセメスターで顕著です。

これに対し柏キャンパスは、規模を反映して数値自体は低いですが安定しており、コロナ禍以前と比べた減少幅も、年間を通した変動も、いずれも小幅にとどまっています。



このように、傾向はキャンパスの特性を反映していますが、感染防止と研究・教育の継続との両立の努力はいずれも同じです。

（杉山清彦／総合文化研究科・広報室副室長）

※「学内広報」では広告掲載を受け付けています。出稿を検討したいという皆様のお問い合わせをお待ちしております。→本部広報課（03・5841・2031）

七徳堂鬼瓦

待ち遠しや、ありきたりの日常

藤井新総長のもと新年度を迎えたが、国内外のコロナ禍収束の見通しが依然として不透明で、なかなか晴れ晴れとした気分になれない。モヤモヤした気分を解消するための特効薬は、私の場合、寄席で落語や漫才を聞いて現実逃避することなのだが、残念ながら一年以上ご無沙汰だ。私の教員・研究者としての活動を精神面で支えてくださっている（と勝手に思い込んでいる）大衆芸能関係者に少しなりとも恩返しをしたいと思っていたところ、何度か行ったことのある落語小料理屋が映像配信をするためのクラウドファンディングを募っていたので、ここぞとばかりに献金した。ところが、いざライブ配信された落語の世界に、うまく気持ちが入り込めなかった。そうか。寄席で気持ちがほっこりするのは、笑い声や掛け声を介して観客同士が共鳴しあうことの効能だったのかと、空間を共有することの大切さをこの一件で改めて認識した。

オンライン講義にも対面講義よりも優れた点があることに気づいたのは、私にとっては思わぬ収穫であった（環境整備にあたっていただいた関係者の皆様には心より感謝申し上げます）。例えば学生からは、質問しやすいので教員との距離が縮まった、理解が深まったという声が聞かれた。その一方で、オンライン講義では、講義の前後に他愛のない雑談をしたり、講義中の皆の表情や反応などを伺うことができないので、特に初対面の学生同士がクラスメートとしての連帯感を持つのは難しかったであろう。自分の学生時代を思い起こせば、いろんなことを乗り越えることができたのはクラスメートとの繋がりがあってこそだと思う。オンライン講義漬けの学生が感じる孤独感と不安感たるや、いかほどであろうか。学生諸君には、この難局でも人生の宝となる友情を育むだけの逞しさとしなやかさを持ってほしい。同じ釜の飯を食えるのは少し先かもしれないが、せめて同じ部屋の空気を安心して共有できるありきたりの日常が1日も早く帰ってくることを切に願う。

佃 達哉
（理学系研究科）

〒113-8654 東京都文京区本郷7丁目3番1号
東京大学本部広報課 TEL：03-3811-3393
e-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp
www.u-tokyo.ac.jp